

神に正直に

悔い改めを通しての革命、キリストによる自由

ヘンリー・クリート
(2003年2月2日)

なにゆえ、主は憤り
おとめシオンを卑しめられるのか。
イスラエルの輝きを
天から地になげうち
主の足台と呼ばれたところを
怒りの日に、見放された。

ヤコブの人里をすべて、
主は容赦せず圧倒し
憤って、おとめユダの砦を
ことごとく破壊し
この国を治める者、
君侯らを地に打ち倒して
辱められた。
(哀歌2：1 - 2)

私達の教会の長老、教師、そして伝道者への公開書簡：

キリストにおける兄弟姉妹の皆さんへ：

恵みと平和があるように。

神は私達にとても寛容であった。神は私達の「動き」の始めから、私達すべてに大きな愛を示してくださった。私達、そして息子や娘の目の前で、数え切れない奇跡、しるし、驚くべき御業が起こった。彼らの多くも今や弟子である。私達の足元で、気付いてもいない恵みはるかに広がっている。今まで成し遂げられてきたことのすべてを、誰が想像できただろうか？しかし、私達の短い歴史の中で、自分達が成ってきた姿にこれほどまでに警戒したこと、そして恥ずかしく思ったことはない。また、最近の問題を掘り下げる手助けをする上で、私自身の罪に直面し、悲しみに打ちひしがれている。

岐路と危機

私達の動きは、もはや動いていない。これはよく耳にするような、単なる「ぎこちないティーンエイジャーの段階」ではない。明らかに、私達が「現代の神の動き」であることの自らと世界への証として建てて来たすべての高い門柱、誇りにしてきたすべてのトロフィーは、瞬間に打ち崩された。私達が誇ってきた数字的な成長、保持率、子供達の信仰深さ、決して欠かさない特別献金、継続的に犠牲を払い与えること、そして恐らく最も苦痛なことであろうが、私達の心の一致でさえも、神の御手によって打ち倒されたのだ。何を根拠に、今私達は自らを「現代の神の動き」と呼ぶことができるのだろうか？そして何を土台に確認できるのだろうか？神はまだ、私達のいくつかの教会、そしてリーダーたちと共におられるのだろうか？私達が信頼を置いていたすべてのものは、もはや取り去られた。

「恵みによって選ばれた残り者」。「自分の血の中で死にかけていた」所から救われた赤ん坊は、成長して、それはそれはとても高飛車なお姫様になったものだ。さあ、どうする？ 預言者によれば、私達の着物の裾は頭まで持ち上げられ、私達の恥はあらわになったのだ。もう一度聞く。私達は「国際キリストの教会」、「御国」、「唯一の眞の教会」であり、いまだに恵みにより選ばれた唯一の者なのだろうか？ それとも、その主張自体、神にとって耐えられないものだったのだろうか？ これは聞くに堪えないことだと思うが、私も皆さんと共に嘆いている。

兄弟姉妹の皆さん、御国のリーダー達、キリストの僕として私達は立ち止まり、深く熟慮する必要がある。私達は岐路に立たされている。勇気をもって行動を起こさなければ、危機に変わる岐路である。倒れた長老や伝道者。スタッフであろうがなかろうが、辞任もしくはステップダウンした、数え切れないリーダー達。疑わしい慣習や教え。金銭管理に関する深刻な問題。今ようやくオープンに話すことが「許可された」信仰のある、しかし疲れ果てた弟子たちの口から発せられる心の痛み、落胆、そして嫌悪（何人かは大きな怒りと共に）。立ち去った、もしくは押しやられた何千何万の人々。常に私達をチャレンジしてくる巨大な批評家たちのサブカルチャー（正直に、彼らの何人かは誠実で、良心的である）。これらすべてとそれ以上のものによって、私達の高潔さは汚れ、「聖職者」と「平民」との間の不信は深まり、そして多くの人々に私達の道徳的な権威と正当性までもを疑う根拠となったのだ。

私は、神が行ってくださった奇跡的な素晴らしい事柄や、一般信徒の信仰と誠実さを否定しているのではない。また、神に対する皆さんの愛や、情熱、個人的な犠牲をもた。しかし、私は動きとして私達が成ってきた姿 もはや動いていない動き に対し、なぜそうなってしまったのかということをも憂慮しているのだ。それこそが私の投げかける問題点であり、また私の論点なのだ。私達に何が起こったかという事実自体ではなく（それも広範で深刻ではあるが）、より深く、なぜそれが起こったのか、そしてさらに深く、なぜそれが起こることが容認されたのかということが。

ロンドン/イギリスでの激変

多くの皆さんがご存知のように、ロンドンで、私達は霊的激変の渦中にある。私はこれを危機、もしくは破綻とさえ呼ぶ。是非、私達のために続けて祈っていただきたい。ロンドン及びイギリスの教会は、輝かしい歴史を持ち、私達の動きに多大な貢献をした。しかし不運にも、長年に渡り多くの傷を負ってきた。テンブラー夫妻は、その厳しいリーダーシップにより辞任を余儀なくされた。ここにマーク自身が書いた手紙を引用する。「教会は霊の実を結んでおらず、多くの人々が傷ついた。アカウントビリティ(責任を課すこと)、プレッシャー、否定的な雰囲気は励まされるものではなく、キリストが持ち上げられていなかった。多くの魂は救われた。しかしまた多くの魂を失った。」

エイドリアン・ヒル氏の反応は、「この段階で明らかになったのは、マークとナディーン・テンブラーは、フルタイム・スタッフとして喜んでいなかったということだ。威圧的なリーダーシップ・スタイル、そして厳格なアカウントビリティの管理によって、厳しい雰囲気を作り出した。私達は、今起こっていることの責任を取ったテンブラー夫妻を賞賛する。」

しかし、重要なことは、最近の危機で表出しているロンドンでの問題、そして今オープンに分かち合われている感情の深さは、テンブラー夫妻のリーダーシップのみの問題ではなく、過去 20 年の教会の歴史、特に最近およそ 15 年間培われてきたものなのだ。

神は言われた「もうたくさんだ」

長年続いてきた、「聴く耳を持たない」風潮、繊細さの欠如、横暴、強制、律法主義と、真理のた

めに立ち上がらないフルタイムミニストリーリーダー達の臆病から来る反動が、現在進行している。私達は、痛いほどのオープンさと、苦悶の真っ只中にいるのだ。今ほとんどのミニストリースタッフの信憑性が疑われている。私達は、公開討論の場を持ったところ、長年の苦しみ、疑問、そして懸念があふれ出てきた。敵意に満ちたもの、言葉にならないほど悲しみに満ちたもの、そして確かに不平なものもあった。しかし、どんな小さな言葉にさえも意味がある。

一言で言えば、今まさに蒔いたものを刈り取っており、私達の動きの制度化された慣習と罪が神によってあらわにされたのだ。ただそれだけの単純なことだ。この劇的などんでん返し、明らかになった過程の素早さと衝撃は、人間によって画策できるものではない。人間起源のものにしては、あまりにも苦しく、呆然とするほかはない。神の存在は、時に圧倒されるように感じる - 神の畏敬、そして恵み。大部分の噴出はある程度落ち着きはしたが、嘔み合いや共食いはいまだに続いている。心は裂け、押しつぶされている。フルタイム・スタッフ間でさえも、怒りと傷と不信が渦巻いている。(しかし断固として、そして恵みをもって対処されている)。教会は何人かに辞任を要請し、また何人かは自ら辞任した。実際、フルタイム・ミニストリー・スタッフの大部分は、将来「他薦」されるまでの間、役職から退くことを勧められた。既に何人かは半永久的にステップダウンした。

この動乱の最中、クリスチャン達は自由を感じ、奴隷から解放されたたとえ感じている。そして、傷と苦悩にも関わらず、全般的に彼らは、神が御自分の約束に忠実であること、御自分の民を救うために来られたこと、また神を畏れ、神の羊の群れを自分よりも愛し、もはや彼らを支配することのない羊飼いをくださるといことを信じているのだ。私は、多くの人々の叫びが届き、神が雷鳴と共にお答えになっているのだと考える。一言で言って、神はうんざりしたのだ。彼の羊は救いを得、彼の「指導者」は今、弁明をしなければならないである。

革命の震源地

ロンドンで挙げられている問題の詳細について立ち入る必要はないだろう。このクリスチャンたちが上げた声の大半は、多くの批評家や「フォールアウェイ」の人々が長年上げてきた声と非常によく似ているということだけ言っておこう。同じくらい辛辣なものもある。何よりもつらいことは、これらの声が、信仰深く、忍耐強く、善良で高貴な心から、また「主における」ベストフレンドからさえも発せられているということだ。彼らは長年これらの感情を抱えて生きてきて、今になってようやく、皆で勇気をもって話すことができるようになったのだ。当然の結果であろう。

私の知る限り、教会の歴史上、今までで最も重要な出来事となるのではないが。これはインディアナボリスで起こったことよりもはるかに重要である。実際、私達の始まりから今まででも比類のないものだ。これは世界中で反響を呼ぶと確信している。ロンドンは世界中に巨大な波を立てる、神の「新しい動き」の震源地となるだろう。まさにこのために、私はそのことについて書いているのだ。神によって、驚くべきチャンスのドアが開かれた。悔い改め時リストにおける自由の再発見への道。神は私達に進入するように頼んでいるだけでなく、命令している。さもなければ、私達は神の恵みと喜びを無駄にするであろう。

もちろんこれは非常に個人的な文書だが、現実的に私の標的はある特定の人物ではなく、私達の「宗教文化」なのだ。ロンドンでの激変は、あきれほど長い間チャレンジされてこなかった制度の害悪に、真っ向から対抗するためである。反乱とは言わずとも、抵抗は常に、順応と強制の実であり、そうであるべきだ。「あなたは代価を払って買い取られたのです。決して人の奴隷にはなりません。」「しっかりとしなさい。再び奴隷のくびきにつながってはなりません。」J F ケネディーはかつてこう述べた。「平和な革命を阻むなら、暴力的な革命は不可避である。」平和な革命のために祈っていたきたい。

事の発端

マークとナディーンは御国の真のヒーローであり、またそう呼ばれるにふさわしい。彼らは、私達の大半よりもはるかに福音のために仕え、犠牲した。マークとナディーンはキリストのためなら殉死さえ厭わないであろう。それほどキリストを愛しているのだ。過ちや罪もあったが、彼らが明確な良心と共に生き、リードしていたことは疑う余地がない。しかし、彼らは罪を犯し、激しく倒れた。それが暫時であろうとも。彼らは既に悔い改め、もしくはその過程にあり、また辞任するという決心はロンドンに必要な癒しをもたらすために重要なことであったと思う。マークはとても親しい、長年の友人であり、私にとって身を切られるほどつらいのは、善良な人間がまた一人、「私達の制度の罪」に陥るのを見なければならぬことだ。

いわゆる(昨年 11 月の)L A ユニティー協議会の後、マークはオープンにフルタイム・スタッフからの正直なフィードバックに耳を傾け、傷、質問、懸念、時には怒りの一方的な砲弾を浴びた。それは、個人的に何週間も続いた。彼らにとって衝撃的で、すべての人にとってつらい時期であった。個人的には、それは人間が成すことのできる最も勇敢な決断であり、正しかったと思う。

マークは自分の罪に対して責任を腐った。そして、権力の乱用によって傷ついてきた残りのスタッフも自分自身が長年与えてきた、誤ったプレッシャーと慣習を認め、イギリス中ですべてのプロセスがドミノのように総崩れになっているのだ。悔い改めと癒し、そして大きな信頼の回復のために、命令、怠慢、臆病、悪い神学論、また無責任さにいたるまで、私達の罪はあらわにされ、認められなければならなかったのだ。

なぜ私はこのことを皆さんに伝えているのか？特に、なぜ皆さんにある特定の人物、マークの罪と欠点などを伝えているのだろうか？なぜなら、マークは、同様の罪に捉えられた、あるいは今捉えられている何千人とは言わずとも、私も含め何百人ものリーダーの一人であるからなのだ。そして彼に絡み付いている同じ制度の害悪が、何千何万もの人々にも絡み付いている。これは、私達の階層のどのような現実、本質である。皆さんが見るように、私がこの文書で扱う多くの課題は、私達の運動特有の「文化」なのだ。権力の腐敗、自己中心的な野心、恐れと臆病の風潮、虚勢、私達の「トップリーダー」からの二重の階層。なぜそれほどまでに恥ずかしく、悲しく思うかというと、私自身が同様に責められるべきであるからだ。しかし、現実には、程度の多い少ないは問題ではない。なぜなら、ある程度、私達のほとんどに同様の罪があるからである。

救いの問題

私の批判と懸念は、単にある特定の人物のリーダーシップ・スタイルに対してではなく、また少数の頭に血を上せたリーダーや、おおげさなほど情熱的ではあるが未熟な伝道者の行動に対してのみではない。これらは、動きの中で、私達すべてに共通の罪であり、弱さなのである。単に、やり方や、ある歴然とした不足に対する小さな愚痴や批判でもない。事実、これは皆さんと私の救いの問題であり、また当然の成り行きとして、私達のメッセージを聞く人々の救いの問題だという考えに達した。悲しいことだが、言葉を注意深く選んで言おう。私達の「福音」の完全さ、そして私達の教会の将来の妥当性と力は危機に瀕している。そして、ロンドンのように、必要である事柄に関して「御国」全体としての罪の告白と、悔い改め、明確な糾弾、そして最も難しいであろうが、誠実な公式謝罪がなければ、実にほんの数年後には異端と化してしまうであろう。

ファリサイ派

ファリサイ派の罪は、彼らの宗教的文化に特有のものであった。私が言いたいのは、「グループ内部」には、この害悪から免れる道はないのである。彼らはただ、制度「内」から逃れられなかったのである。もし彼らがなんとか客観的にその事実を見ることができたとしても、ファリサイ派であり続

ける限り、その腐敗から逃れることはできなかったのだ。彼らの派閥の悪魔的な価値観と、蔓延した影響は、多かれ少なかれすべてのファリサイ派の人々に触れている。彼らの高慢さと傲慢さ、排他主義、エリート意識、外面のうぬぼれと威勢、尊敬と権威と個人的な名声のための肩書き、多くの人々をつぶした彼らの重荷、自分達の制度を維持するためにやもめの家を食物にしたこと、隠されてはいるが「軽蔑的な貪欲」これらはファリサイ人が、「彼らの一人」であるかぎり免れないものであった。

ファリサイ派、または、「聖別された者たち」は、見当違いではあるが高貴な意図を持って始められた。彼らは無法者から律法を守りたい一心で、規則と戒律の宗教制度と伝統を押し付け、神の律法の周りに垣根を築いた。彼らは、「もし我々の規則を破らなかつたら、彼らはモーセの律法も破ることはできないだろう」と理由づけた。私達はすべて、この事実をよく知っている。また私達は、その嘆かわしい結果も知っている。自由が否定され、個人の尊厳は失せ、安息日は過酷になり、正義、愛、憐れみという律法の重要な事柄はないがしろにされ、そして究極的に、権威に対する人々の結果的な奴隷状態。

ひとたび宗教制度が確立したなら、次は安定と維持を必要とするのみなのだ。当然のごとく、時と共にファリサイ派は組織として、制度的に悪となるのである。従って、彼らが「全体として」陥っていった姿、その進化した姿は、あらわにされ、キリストによって強く糾弾されるべきであった。それはどれほど彼らの気分を害したことだろうか！事実、今までに宗教指導者に対するこれほど執拗で厳しい攻撃を見たことがあるだろうか？誰もいないであろう。

確かに、誠実なファリサイ人もいたであろう。パウロはその一人であった。福音を読むと、そうと思われる人は何人かいる。しかし総体的に、宗教的権威の制度として、彼らは「地獄の子」、「愚か」、「もの見えない案内人」、「白く塗った墓」、「蝮の子ら」、そしてついには、神の善良さと恵みの真理を阻む障壁であった：「人々の前で天の国を閉ざすからだ」。

彼らは律法学者、教師であり、頭脳明晰、著名であり、とても尊敬されていた（少なくとも彼らの目の前では）。また「モーセの座」に着いており、「従う」必要があった。彼らは、究極的な献身と情熱の人々であった。遠い国々への宣教師であり、狂信的にすべての外側の罪を「分離」した。しかし、彼らの神への誠実さと情熱にも関わらず、ファリサイ派への改宗者すべては、イエスの言葉によると、その人を改宗した人より「倍も悪い地獄の子」になったのだ。それだけ宗教制度とは力強く入り得るのである。それは、良心の声を、理性の声を、そして神の声までも無視し得るのである。

これを踏まえ、私達はリーダーとして立ち止まり、自分達自身のリーダーシップ観と教義について考え直すべきではないだろうか？私達はキリストと宗教指導者の間に繰り広げられた当時の戦いがどれほど甚だしいを極めたかを悟ったなら、へりくだって、神の前で恐れに震えさえもすべきではないだろうか？なぜそこまで厳格な糾弾と警告が発せられたのだろうか？なぜそこまで白熱した口論が福音に書かれているのだろうか？なぜイエスは、柔和で謙遜な者でありながらも、公の場で彼らを叱責し、侮辱し、彼らの偽善を公の恥にさらしたのであるだろうか？私の答えは、彼らが、現代の宗教指導者であるあなたと私への戒めと勧告になるためなのだ。高慢とコントロール、排他と貪欲に傾くこの悪魔的な傾向は、どのような名の下で行われようと、いつの時代でも、神のリーダーの高潔さに侵入して滅ぼし尽くすまでは、戦争を仕掛け続けてくるであろう。私達を通して、教会にも。

背教

背教とは私達すべてが知っており、恐れている言葉だ。私達は繰り返し、長年このように互いに警告しあってきた、「私達は背教から一步手前の世代だ。」これは、真実の言葉である。数年の間に、ガラテヤ地方のすべての教会は、全地域で、恵みから離れつつあった。従って、ガラテヤの手紙でパウロは、彼の福音の擁護時リストにおける個人的な自由について非常に緊急性を感じ、怒りさえもした。

彼の使徒としての権威、つまり彼の福音は攻撃されていた。結果として、彼らの救いと「真の福音」が危機にさらされていた。彼らを毒した律法学者たちは呪われたものであった。

同様に、何十年かの間に、小アジアにある7つの教会のうち、5つの教会は既に背教した、あるいはしつつかつあった。(黙示録2 - 3章) どれほど早く宗教的な動きは腐敗してしまったことが！復活を目撃したその世代で、生きた使徒たちによって指導されていた教会で！

総合的に「動き」として、私達は、抜け道を見つけることは言うまでもなく、認めることさえも難しい、いくつかの制度的な害悪に屈服してしまった。私達が失い、屈服し、腐敗したものを取り戻すためには、断固とした、勇敢な正直さと、神と御言葉の前で砕かれた心が必要である。私達がすべての宗教文化を真っ向から攻撃しなければ、私達の罪や慣習は永遠に続くであろう。もしくは、神が羊飼いを撃ち、羊が永遠に散らされるまで。私達は、感情論を抜きにして、何が制度の害悪であったか、何が悪い神学論であったかを認め、そして公の場で糾弾しなくてはならない - 私達の教会に対し、そして必要であれば、世の中に。

「私達の制度」

総合的に動きとして それは世界の全教会を指しているのだが 私達は背教と言わずとも、深刻な過ちに滑り落ちてしまった。悪魔は私達の首筋深くその牙を刺し入れ、悔い改めなければ、私達の多くの教会と、さらに何千人ものクリスチャンが食い尽くされてしまうであろう。

少数の例外を除いて、私達はもう一つの宗教「制度」になってしまったのだ。少なくとも年々このような言葉を聞くことが多くなった。恐らく今月だけでも100回は聞いた。私を恐れさせ、同時に嫌悪さえも感じる言葉。悪魔は私達を騙している。どのような理由であれ、私達はその牙と爪と戦ってこなかったことを認めようではないか。私達はファリサイ派のように高慢に、そして盲目になった。自覚のない盲目こそ、盲目のうちでも最も恐ろしいものである。この文書は、手遅れになる前に目を開くことができるように書かれた。私のゴールは、心を砕くことだけではなく、ある意味で、自分達の顔に平手打ちをくらわすためである。

私個人は、制度に属することを断固拒否する。明白に神から来たのではない、いかなる制度にも。私は御国と、神であり人間でおられるイエス・キリストにあずかるために洗礼を受けた覚えはあるが、決して制度にあずかるためではない。それこそ私がずっと欲していたものである。それだけあればいいと思っている。

失敗は赦されない

初期に設立された教会の一つであるロンドンは、非常に多くの熟練伝道者が入れ替わり立ち替わり牧会し、御国全体に非常に大きな影響があり(いい意味でも悪い意味でも) 良くも悪くも私達の動きの縮図であると個人的には思う。従って、このプロセスは成功しなければならない。しかしなぜ私は失敗するかもしれないと恐れているのだろうか？

ロンドンでは、長年のリーダーシップ構造を変えるだけでは、もしくは、ただ特定の罪や横暴にっいて認めて謝罪するだけでは、いくら誠実であったとしても不十分であろう。クリスチャンたちは、はるかに多く受けるに値しており、正当に、当然のごとくもっと多くのことを要求している。全体的に、彼らは広くはびこるリーダーシップの罪と横暴にうんざりして、嫌悪し、また怒っており、今となっては、皆さんが霊を通して「石頭」とさえ呼ぶような状態になっている。もはや戻る道は閉ざされた。

私達の成功への秘訣はこれである：罪や横暴が大胆に悔い改められるだけでなく（しかもその数は多い）より重要なことは、それらを培った構造的な害悪が神学的にあらわにされ、**糾弾**されることだ。私はこのきわめて重要な段階を経なければ、十分に深く、継続する変化は期待できないと思う。真の赦しと癒しは言うまでもなく。今はロンドンの私達にとって言い知れない苦しい時であるが、もしこのプロセスをないがしろしたり、性急に行ったり、覆ったり、冗長にしたりすれば、その結末はより苦渋に満ちたものとなるであろう。

その上で、もし私達がこの段階を通過したなら、回復にそれほど時間はかからないと思う。もちろん「恐ろしい」ことではあるが、私達は神が恵み深く、純化する御業を成し遂げようとされていることを信じようではないか。イエスは小アジアの7つの教会に、「私はあなたがたの行いを知っている」と言ったあと、ただ一言こう言った、「悔い改めよ。」

端的に言えば、ロンドンが私達すべてである。私達特有の宗教的な動き、私達の文化、信仰制度、霊的な虐待、クリスチャンの訓練方法、そしてコントロールの仕組みは、隅々まで広まり、はびこっており、それら公式に、そして一様に、公の場で糾弾されなければ、その悪弊は永遠に続くであろう。害悪と悪い神学論を一掃することは、**さらけ出して、反抗すること**によってのみ可能である。これは、次の「L Aミーティング」の緊急課題であるが、5ヵ月後では十分に早い対応はできないのではない。動き全体で、私達は認めて謝罪し、さらけ出して根絶し、糾弾して廃止する以外の選択はないのだ。

釈明と用語の定義

釈明

「人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。」

続ける前に言うておくが、私は辞任する意思はないし、陰で教会を離れようなどとも思っていない。私は教会の交わりを心から愛しており、神が私達のために、私達を通して成し遂げてくださったすべてのことに感謝している。しかし、私にとってこれは、恋人同士の痴話ゲンカ以上の意味があるのだ。私は伝道者として呼ばれたのであり、それはしかるべきことである。私は神の目的を宣べ伝え、弁護するために呼ばれた。結果はどうであろうとも、私は激しく応戦するために選ばれた。

- 私はかつてないほど話し合いや討論をし、放棄または廃止するための準備ができています。その上で、必要であれば、関わりを断つ用意があり、仕方がないのであれば、関わりを断たれることも覚悟しています。
- この文書を書いている理由は単純である。誰も書かなかったから。書いた人がいたとしても、なら変化は起こっていない。私はこれを18ヶ月前から書き始めたが、そのまま放置しておいた。私はおびえていたのだ。しかし、最近の辞任と、(私の意見では)「失敗に終わった」L Aユニティー協議会、そしてロンドンで起こっている霊的な危機によって、より適切な機会はないと判断した。私は自分の決意を固めることができた。
- 皆さんが私の言葉を注意深く計りにかけることを願う。私が誤っているのであれば、恐れることはない。同意しないのであれば、あなたは反論しなければならない。
- 私は多くの皆さんが、善良で、高貴な心を持ち、誤ちに抵抗しようと声をあげたことを知った。あなたがたは真に恵みと自由の代弁者である。しかし、私達のすべては、多かれ少なかれこの論争に巻き込まれた。それこそが、制度の害悪の本質なのだ。私達すべてが一斉に猛攻しかければ、

その動きは広がるであろう。

- 私のコメントは、何千人ものクリスチャンの共通の経験、何百もの個人的な会話、「夜更かし」の会話、そしてフルタイムスタッフや一般の弟子による公の場での陳述と意見に基づいている
- 私の言葉はそう簡単にかたづけられない。私達は1981年に初めてボストンを訪れ、82年の春に引越した。思うに、そのような行動をとった3番目のカップルだった。私はすべての人にディサイプルされた：ポブ・ゲンブル、キップ・マッキーン、アル・ベアード、ジム・ブラウ、マイク・タリファー、マイク・フォンテノットなど。ダグラス・アーサーは13年以上私の人生に大きな影響を与えてくれ、ダグラス・ジャコビーもそうである。ロンドンに引越す前（2回目の時）私達はダグラス・アーサーの下で、94年から2001年までアメリカン・COMMONWEALTHS・リージョンで働いた。多様なサイズで、マリリンと私は、4つの大陸、6つの国、2つのワールドセクター、10個の教会、そして約15のミニストリーに住み、働いた。私は、理由があっただろう言っている：私達は過去20年間、十分見て、経験し、聞き、やってきた上で、大きな苦しみの中でしかし深い確信と共に、私達はいくつかの制度の害悪に捕らわれているということを経験するに至った。すべてを取り囲み、私達の教会の交わりすべてに影響する害悪。
- 長くなってしまったことは申し訳なく思いますが、私の論点を証明するためには必要であると思った。私は、できるだけ整理し、読みやすくしたつもりである。すべては引用しなかったが、ほとんどの聖句は皆さんもご存知のものだろう。すべて引用した聖句もある。
- 実例の強烈さと数は圧倒させるためではなく、もちろん圧倒するとは思いますが、私の基本的な議論をより確信深く証明するためである。
- もちろんこれは非常に個人的ではあるが、私達すべてのためである。しかし、私は皆さんが人間ではなく、課題にフォーカスできるように「個人的な例」を極力使わないようにした。

用語の定義

「ここでいう主とは、“霊”のことですが、主の霊のおられるところに自由があります。」

1. 自由：ギリシア語 *eleutharia*；自由、寛容、独立。恵みの摂理特有の祝福、旧約聖書の人生に関する律法的な制約と規則と対比する。対語：*deouleria*；奴隷、または依存の状態、または決められた道に従わなければならないこと。
2. 制度の：「体全体の、体全体に付随する、体全体を影響する」
3. 特有の：「広範囲に広がる、特定の地域の人々に特有の」。例えば、熱帯特有の病気。
4. 背教：「忠誠、特に信仰の放棄」

制度の4つの害悪

もしの神の動きが洞窟で生まれ大聖堂で死ぬのなら、私達の大聖堂には廃止され、粉碎されるべき4本の柱がある：

私達の腐敗した階層制

私達の数への執着

私達の恥ずべき傲慢（1と2の原因/副産物）

私達の金銭への誘惑

1. 私達の腐敗した階層制

災いだ、罪を犯す国、咎の重い民
悪を行う者の子孫、墜落した子らは。
彼らは主を捨て
イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けた。
何故、お前たちは背きを重ね
なおも打たれようとするのか
頭は病み、心臓は衰えているのに。
頭から足の裏まで、満足なところはない。
打ち傷、鞭のあと、生傷は
ぬぐわれず、包まれず
油で和らげてもらえない。 イザヤ 1 : 4 - 6

一言で、意図するしないに関わらず、私達は自由よりも、コントロールの文化と、人への依存を創り出し、培い、維持してきた宗教的な階層度になってしまった。この階層でのリーダーとして、私達は衝突を避け、臆病で、神を喜ばせるよりも人を喜ばせる者になってしまったのだ。これが、私達が何をしているかだけでなく、なぜ続けてきたかということの説明する唯一の道なのである。

私達が上下の階層になっているのかというのは疑問の対象ではない。事実そうなのだから。なぜ私達が、使徒の教会にそのようなモデルがないにも関わらず、このモデルを選び、そしてそれを具体化したのかということこそが大きな疑問である。模倣できる他のモデルもあったのにも関わらず、より詳しく知っている教師たちが教会にいたのにも関わらず。事實は、私達はこの形を選び、制度的に押し付けたのである。私が「押し付け」という言葉を使用する理由は単純である：私達は自分達がなりたかったものになったのである。私達がなろうと言いつ張ったものに。

これはどのように起こったのか？私にははっきりと分からない。なぜ私達がそれを起こしてしまったのかということの方がより根本的な質問であろう。私達は良い動機で始めた：自分達を構造化し、自分達のメッセージとミッションのために枠組みを造り出し、一致と協力を促進してきた。しかし時と共に、私達は人間の自由の尊厳を尊敬しない文化になり、代わりに、私達の下や周りの人々の人生をコントロールするようになったのだ。良い動機であろうとなかろうと、私達は神を喜ばせる人々になりそこねた。神が今私達の個人崇拜と霊的権威の乱用に最大限の強力な力で反対なさっているのである。

コントロールの文化というのはどういう意味であろう？次の事実を考えてもらいたい。私達は階層で、一人の人物が頂点に立って導かれてきた。私達には「創始者」があり、彼は私達が尊敬し従うことを期待されている個人的な、そして「御国全体」の権威を持っている。私達にはワールドセクター・リーダーとジオグラフィックセクター・リーダーがあり、権力の掌握を強固にし、すべての教会に対して地球規模のコントロール・ネットワークを確立している。私達は、「一つの都市に一つの教会」ということを教えた。純粋に一致のためにではなく、コントロールを掌握するための方法として。

地域の教会の自主性は、実質的に異端と見なされてしまった。私達すべてを統制するように威圧的な発言が為された。私達は「代表者会議だ」と言っては招集され、そもそも会議を持つこと自体の目的が消え去っていった。「代表牧師」として私達は、決まって私達のアドミニストレーターに「整列せよ」とか「俺たちに従え」といって強制してきた。計画やプログラム、そして得意のプロジェクトを皆の幻滅をよそに無理やり認めさせながら。アドミニストレーターは財政に関して順応の名の下に偽りや「煙に巻くこと」を容認されてきた。もっとおびえていた人の中には、大規模な財政不正管理に手を染めた人もいる。

私達は日常的に批判者の悪口を言い、私達のメンバーを「霊的なボルノグラフィー」を読むことから守ろうとしてきた。私達自身の教師からの優れた、聖書的に洞察のある論文など他の資料もメンバーの間で広まらないように検閲されてきた。基本方針にそぐわない論文はすべて。

私達は決まって、率直な声をあげるメンバーを「批判的だ」とか「忠実でない」と卑下し、のけ者にしてきた。私達の多くの教会には独裁的なリーダーがいる。私達は、順応に対して褒美を与え、指揮系統の上部にいる人々に高い給料を与える。私達は外面の順応を評価する。

「公式な御国」の問題は、毎年恒例の強制的な特別献金、世界規模の月間スタッフ収集、そして私達の「公式な」情報源としてのKNNビデオニュースや公式サイトUpCyberDown。(これらの問題のいくつかは、エド・パワーズによって持ち上げられた課題と同様であるが、彼はディスフェローシップされ、警戒された。彼のアプローチを是認することやその一貫性にコメントせずとも、どれだけのほかのメンバーやリーダーがこれらと同じ慣習や宣言に疑問をもってきたことであろうか?)

私達はまた、その影響や、抑圧された疑いを、誘導、不透明性、そして二重の基準によってごまかしてきてきた。例えば、私達は自分達より下の者の罪に対しては非常にオープンではあるが、「上」の者に対してはそうではない。なぜなら「教会を傷つけるから」。

私達は長老が明らかに「群れの監督者」としてより高い道徳的、霊的な条件を有するにもかかわらず、伝道者に長老以上の権威を与えてきた。キリストの血によって買い取られた人々を守るように特別に命じられた人であるのに。なぜこうになってしまうのか?

そもそも、なぜ、私達の間でこれだけ長老が少ないのであろうか?これは必ずしも家族や成熟度の問題ではなく、私達の基本方針に完全に献げる用意のある人、もしくは、フルタイム階層から上がってくる人がそれほど見つからないからである。彼らの地域の教会は彼らを信頼し、推薦するが、私達はそうしない。彼らは、「制度」に順応するかどうか証明していないので、私達にははっきりと分らないのである。

私達は教会に対するいかなる批判をも、罪深いと決め付けてきた。私達は、悪い心や悪い態度、そして独立的な態度を示す人々を、多くの場合そう感じる権利が十分にあるのにもかかわらず、責め立てる。誰かが教会を離れる時、彼らは自動的に「フォールアウト」と称される。でもなぜ?多くの人は良心の呵責を感じ、厳しく接されて、または、彼らが導かれたやり方に対して、あざむきや罪悪感を感じながら離れた。彼らが私達の階層を離れたからといって、神から離れたと宣言するのは公平であり、正しいことなのか?他の人は留まる選択をしたが、同意しなければ不和だとか不忠実だとかレッテルを張られることに対して恐れながら生き、結局順応のために悪いアドバイスに従うしかないのだ。他の人はすでに麻痺し、静かに傷つき後ろに座っているか、転がって死んだ振りをしている。

ディサイプリングについて

私達は誤って、羊は愚かであると仮定してきた。私達は彼らがキリストにではなく、人に - 実際私達にだが - 頼るように訓練してきた。「アドバイスを求めたのか」という質問は、大部分「許可してもらったのか」という意味である。もちろん、彼らには弱さがあり、訂正は必要であるが、愚かではない。私達の方こそ愚かであった。聖書的に、そして霊的に。私達は逆に、本当の霊に満たされたクリスチャンは、神に反抗したいのではなく、神を喜ばせたいと切望していると仮定すべきではなかったであろうか?

エゼキエル36章:私はお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。私はお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。また、私の霊をお前たちの中に置き、私の掟に従って歩ませ、私の裁きを守り行わせる。

私達のディサイプリング・パートナーの神学論を通して、私達は現代のファリサイ派のように、神の律法の周りに垣根を建てた。クリスチャンを守ろう、もしくはコントロールしようとする過程で、私達は習慣的に彼らのキリストにおける自由を侵してしまった。私達は弟子たちが彼ら自身の確信や決心（そして過ち）で生きることを信頼せず、彼らの中に、成長し成熟する自由ではなく、不健全な依存心を養ってしまった。私達のディサイプリング・ガイドラインの多くは、イエスによって重荷で律法的だと非難されている「人間による教え」以上の何者でもない。心の中で忠実でありたいと思っていない人を、コントロールの仕組みや、人間の伝統、もしくは規則や文化的に容認されている規範によって忠実にさせることはできないのだ。反対に、それは誠実で自由なクリスチャンの間で反抗と批判を**確実に**作り出すであろう。私達は、人間によってコントロールされる存在になるために新たにされたのではなく、むしろ「この自由を得させるために、キリストは私たちを自由の身にしてくださった」のである。

教会の権威について

新約聖書には、他よりも権力のある教会、また「柱の教会」などの記述は一切ない。ある教会を最も大きく、見栄えよくするという私達の見当違いの情熱で、私達は姉妹教会を略奪してしまった。これは人工的であり、人間的に工作された「成長」の法則は霊に導かれたものではあり得ない。これによって、直接影響された人も、またそれを傍で見ていても悪い感情と皮肉を引き起こした。（ヤコブ3章）

自治権と自由の欠如は私達の思考を鈍くした。リーダーシップ構造の多様性、ミニストリーでの女性の役割、献金の集め方、そして私達の教えでさえも（例「公式な勉強」）において、「国際キリストの教会」という「箱の外での思考」は非常に少ない。このすべてが私達のメンバーとミニストリースタッフのコントロールに寄与しており、霊の火をかき消すものなのである。

ミニストリー・トレーニングと実践について

新約聖書には、あるリーダーが他のリーダーをコントロールしている例はない。私達には支配者も御主人様もないのである。イエスは、それは異邦人が切に求めていることだと言った。しかし「あなたがたはそうであってはならない。」聖書は、使徒から「小さい人々」まで私達すべては主にあって自由であると述べている。しかし私達は自分達のリーダーをチャレンジしようとはしない！

なぜそうしないのか？新約聖書ではリーダーたちは批判され、棄てられ、反対され、疑いをもたれ、チャレンジされ、悪い（もしくは良い）報告の対象となった。彼らは自分達自身のミニストリーによって試問され、多くの場合、これは驚くほど容認された。確かに、大半は敵がこのようなことを起こすであろうが、クリスチャンたちはそうすることによって裁かれたりはしなかった。そもそも裁かれる必要などない。多くの偽使徒たちや偽り者が紛れ込んでおり、彼らは警戒しなくてはならなかった。神によって真に認められたリーダーや使徒たちは、彼らの弁明として自分自身の人生と教義に訴えた。それだけがすべてだった。誰も強靱な意志をもった議論好きの相手とは馬が合わない、それがキリストにおける兄弟であったならなさだ。しかし締め出され、恥をかかせられる恐れからの強制された順応は、同等に悪なのである。私達は、「リーダーシップ」に疑問を持ったり、チャレンジしたり対立する自由のある環境を耕してこなかった。私達は恥ずべきだ！

大部分、私達は自分の周りに忠実な人物しか置かなかつた - 必ずしも神や良心に忠実である者でなく、私達に忠実な者。まるでどこかの部族の王のようだ。波風を立てる者は容赦されない。

他の疑問：私達の上にいる「ベスト・フレンドでありディサイプラーである」人が同時に「上司」

であったなら、私達はどうやって完全に正直になりつつ尊厳をもって生きることができるだろうか？もし私が、パウロのように、面と向かって私の「友」に反対するとしたら、もしくは私の「上司」がやりたい行動に対して強くチャレンジするとしたら、私の職業が危機にさらされるだけではなく、私のすべての関係、友情、将来の安定、そして私の家族の情緒と、彼らとの関係も危うくなるのだ。これらすべての忠実さと関心の衝突は絡みあって、巨大な結び目になっており、自分の確信に正直に、忠実になることを難しくしている。これが順応と、究極的には背教、そして枯れ果てた良心に寄与しているコントロールの一面なのである。

私達が思いのままにリーダーを動かし、多くの教会のリーダーシップを変えた方法にも疑問が生じる。多くのリーダーが「うまくやっていない」という理由で、教会のメンバーが彼らを愛し、求めているにもかかわらず、動かされたり、取り替えられたりした。反対に、私達は習慣的にメンバーに相談もせず伝道者のある教会に当てたり、リーダーが自分達のリードする人々に賞賛させるのを容認したりした。そして、その教会が私達の決断を、異議や疑問なく受け入れることを期待した。逆に、教会リーダーが明らかに自分のスタッフやメンバーから推薦されていないのにその地位に長く留まりすぎる場合もある。単純に、彼らには後ろ盾と大きな権力の祝福があるのだ。しかしもっと悪いことに、私達の「高い位の」リーダーは、まさに彼らの行きたい場所に行き、その街を取りたいがために、他の人を押しやることまでしてかしたのだ。パウロや他の弟子たちがそのようにしたとは想像しがたい。

自己描写について

一世代で私達は羊を守ることから、自分達の組織を守るところまで来てしまった。教会をコントロールすること以外に、何が私達の目的であったのだろうか？私達は国際キリストの教会について、批評家をいらだたせ、メンバーを「コミット」させる大げさな宣言をしてきた。私達は「現代の神の動き」と自称し、「この世代でキリスト教を定義する」と言い張ってきた。私達は自分達を「御国」と等しくし、御国の一部としてではなく、あたかも私達が唯一でそのものであるかのように思ってきた。御国は王に属し、神のみがご存知なのにもかかわらず。私達が「唯一の真の教会」と自称する時、私達の傲慢さはいくつかの弊害をもたらす a) 私達こそ正しい教会なので、私達が言うことのほとんどすべては正しくなければならぬことを含意している。b) 従って、順応せよ、疑問を持つな、離れることすら考えるな。他に行くところがあるのか？私達が　　もしくは「地獄」の門か。

受け入れても入れなくても、この発言一つをとっても、順応と「コミットメント」を確立する私達の最も力強い仕組みなのである。私は救いの教義について「寛容」になっているわけではなく、また「他の」教会が救われていると知っているのでもない　　唯一の普遍的な教会、そしてクリスチャンになるには唯一の方法しかない。しかし、私達自身をこのような名称で呼ぶことや、そのような排他主義と優越感を伴って主張することによって、多くの弟子たちは「忠実」であり続けるであろうが、恐れと惨めさに捕らわれて生きるのである。

私達の非常に多くが、盲従するように条件付けされているので、私達はコントロールの仕組みと非聖書的な慣習に議論の審議もなくより深く滑り込んでいくのである。理由は、「一致することのほうが正しいことよりも重要であるから」。確かに時にはそのとおりであるが、正しいことよりも重要ではないはずだ。

2．私達の数への執着

「キリストが私を遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるため」
パウロ

「そのような知恵は、上から出たものではなく、地上のもの、この世のもの、悪魔から出たものです。ねたみや利己心のあるところには、混乱やあらゆる悪い行いがあるからです。」
ヤコブ

「ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」
パウロ

公の場で述べられたかどうかは別として、実際の目的上は：

数の成長、特にバプテスマは、私達の一番の目的だった - 善良さと信心深さを犠牲にしてでも。

私達のリーダーの多くは「数」に関して非常に極端で、彼らを霊的に鈍くし、神経症にし、偶像礼拝者にまでおとしめた。一世代で世界を伝道するという心からの真剣な努力として始まったものは、すぐさま偽りの動機と自己中心的な野心によって苦々しいものになってしまった。私達がやることとその理由に対する動機は、多くの人が回復できなくなる恐れがあるくらい非常にゆがんでしまった。自己中心的野心と人間的さはスタッツ乱用とスタッツカウント、ゴール設定とゴール達成の制度的な悪に導いた。

これはプロセスの中で数え切れない人生を破滅に追い込み、私達の尊厳と牧師やリーダーとしての信頼性を傷つけ、操作、恐れ、人を喜ばせる風潮を促した。何千人も、特に新しく繊細なスタッフ、そして新しい学び会またはファミリーグループリーダーの良心は乱された。そして彼らは同様に他の人にも同じようにすることを促した。これはまさに制度の害悪であり、上層から下層に至る現象である。

「スタッツは道具だ」と私達は言った。それには同意するが、どのような道具なのか？私達が支配している者たちを打ちのめし、苦しみを与えるハンマーやナイフなのか？スタッツは、ふてぶてしい人物の秘められた野心を満足させるために使われるようになった。それらは習慣的におだてと脅迫のため、または私達の上の人物の怒りをなだめるために使われた。私達は人間を持ち上げ、自慢し、誇るために使われた。

もちろん、スタッツそれ自体はただの情報の一部にすぎなく、本当にそれ以上ではない、木や土のはしくれのように。それがねじ曲げられ、私が懸念しているような偶像礼拝に使われるようになり得るのだ。私達のプライドと腐敗した階層構造と共に、それは私達の墮落した本質が抱えるには荷が重過ぎる。

私は、自分のミニストリーや羊の名前を知ること、そしてもし1匹が99匹からはぐれたらすぐに察知することに大賛成だし、予算上のやりくりにも賛成だ。ある種の公的な調査はいくつかの理由でとても役に立つとは思う。私は神が成し遂げてくださったことを分かち合うことにも賛成だ！（使徒11章）そのことを問題にしているのではないことがお分かりだろう。

私は神と互いの前での私達の価値を計るためにスタッツを使うこと、偽りの動機からキリストを宣べ伝えること、数を使って比較、競争すること、そして不安で自己中心な者の不信心なエゴを押し上げることを話している。私達の教会で、この強調のほとんど普遍的ともいえる結果を考慮してみよう。このすべての例は、ある意味で、悪い神学と人間的さの結んだ実である。これは私が過去20年の間で見たこと、聞いたこと、そして自分も関与していたことである：

- 私は不正直なスタッツ報告を何件も知っている。出席者数のでっ上げや割増、「今月成長しなければ」とか「マイナス成長にたくない！」からという理由で「月末」の報告をうやむやすること。
- 私は厳しいアカウンタビリティを逃れるために、「バプテスマ」を捏造した伝道者を知っている。

- 私達は「刈り込み」という名の下で、大規模なメンバーの削除を実践し、神学的に擁護してきさえもした。この現象が不快なだけではなく、完全に聖書的な前例がない。イエスは「そのままにしておきなさい」「妻も毒妻も育つままにしておきなさい。」と言われました。私達は彼よりも強く、賢いのだろうか？何と傲慢なんだろう 私達が略奪したのはイエスご自身の教会であり、私達が切断したのは彼ご自身の体なのだ！
- 私達は時时尚早にも、「堅固な船」を求めて、非常に弱者や非常に落胆している者を取り去ってしまった。全家族はこのうぬぼれと未熟さによって荒廃してしまった。私達は、一言で、無実な者を虐殺したのだ。
- あたかも公理のように、ミニストリーを引き継ぐ新しい伝道者は刈り込みと浄化を実施する。一体なぜこんなことが起こるのか？私達は皆知っている。それは「あなた」の新しい始まりから良く見せるため、もしくは、将来「彼ら」の弱いミニストリーのせいで叱責されないためなのだ。私達がそうする時、私達は天使に対して、そして最初に回心した時に神の前で歓喜した友人の天使たちに自分自身を裏切ったのだ！キリストのような僕であれば、メンバーの決断をする前に、打ちめし、叩き切る前に神からの確証を待つのではないかと？これらの質問に深入りすればするほど、私達の制度の害悪は明白さを増してくる。
- 私達のバプテスマの大部分は、月末近くにある。なぜだろう？いくつかは、恥ずかしながらも、12時直前に。そして、そのバプテスマの大半がフォールアウトになるのはなぜだろう？
- ゴールや目標が満たされなかった時にどれほど私達は自分達のために心を痛めるのか。失われた人のために涙するのではなく。何かが、悲しいほど深刻に間違っていないか？
- いつも心の中で、そして公の場でも、私達は互いを「数」によって評価する 信仰、心、才能、純粋さ、自己評価、素晴らしさ、または「ミニストリー能力の欠如」は常に判断されている。そしてこの大部分はプライド、ねたみ、不安、競争心、そしてひどい人間のさから来ている。真の神の人は、まったく、にんじんを棒に吊り下げたような制度によって導かれるのか？もしくは、愛、道徳的義務、そして福音を拒否した時の結果などもっと本質的なものによるべきではないか？
- どれほどのクリスチャンが、他の都市から私達のミニストリーに移ってきた時にないがしろにされたであろうか？正直にどうしてだろう？「もし彼らが弱く、メンバーとしてカウントしたなら、フォールアウトした時に私達が悪く見えるから」。たいそうなことだ。彼ら自身に証明してもらおうではないか！もちろん、この邪悪なうぬぼれによって彼らは離れるかもしれない。しかし彼らの血は私達の頭に降りかかってくるのだ。
- 私達は、特に会議などの場で、またはスタッフミーティングで数が「平均より低い」のではと常に不安である。
- バプテスマが多ければ、数がよければ、より栄光を浴び、発言する「権利」が増え、尊敬も増える。
- 私達は、「いつでも、昼でも夜でも緊急に」という思いではなく、日曜日にバプテスマを取っておくようになり、一日に100人単位の大量のゴールを成し遂げるために特別礼拝にまで引き伸ばすようになった(教会を励ますため！)。一日に100人のバプテスマを持つことやそれを狙うことさえも、まったく励まされない。それは福音を侮辱することだ。いつもうさんくさい。これは天使を喜ばすか、辱めるのか？まず、月末までに成し遂げなければ！だめだったら彼らを特別礼拝まで引き伸ばそう！それは単にプライドと二枚舌でなく何であろう？精神分裂病では？
- どこからそしてなぜ「good」「great」「awesome」は来ているのか？なぜ私達はこの愚かな人間的さとプレッシャーに耐えているのか？あるところでは、スタッツシートに「poor」とさえ書いてある。それはインターンにとって最高の励ましだ！ちょっと恥ずかしくはないか？
- LA 比率。それは一体何なんだ？私達がかも使徒比率、パウロ比率、またはアンティオキア比率を持っていたら？私達は恥に埋もれられないか？だから聖句にはそれらしきものは一切記述されていない。神は私達を非常に愛しておられるから。
- 初期、私達は何百人に「再洗礼」を授け、スタッツシートに最初のバプテスマと記載した - あたかも皆を騙すようにして。私はこの慣習は止まった事を知っているが、それは私達の現在の数への執着と評価の不穏な前兆を示していた。

- 私はスタッフの95パーセントが、「従う」ように、また「他の人にも従わせる」ように期待されているゴールに対して葛藤している教会にいた。憐れみによって、神は私達を失敗させた - しかしそのすべてを通して、誰も声を挙げなかった。ようやく1ヵ月後に、スタッフは内面の葛藤に対して正直になった。こんなことがありえるだろうか？(後で私自身の臆病さについて触れる。)個人的に話しに行った人は叱責された。
- 私達はほとんどすべてのスタッフが出席者数とメンバーシップの数をごまかしていた最も大きい教会の一つを知っている。何人かはクビになった。そのような行動はどこからくるのか？それは自分達自身が作り出した宗教文化からでは？神への恐れよりも力強い「力」はあるのだろうか？私達の恐れと人を喜ばせる文化だ！
- 私達は、「数が傷つくので」人々を「自分の」ミニストリーに抱える。その人の希望がその人にとって最善だとしても、家族に近くなるためや仕事のために順当であるとしても、「植えられた所で咲け、送られたところへ行け。」私達は聖書の御心や、個人の意志がどう分かるというのであろう？風景が変わることの何がいけないのか？私達はいつもやっているではないか？私達は恥ずべきだ！
- 私達は常に、シャープな人や目立つ人を貧しい人や才能の少ない人よりも重んじる - 彼らが「教会のために」成し遂げてくれることのために、私達は邪悪な考えをもっているとヤコブは言った。
- 多くの人は、「本当の」ミニストリーの時間を取られるからといって、弱い人を邪魔者にし、ないがしろにした。なんだった？私達は心と魂を尽くして迷子を捜しているのではなく、数字の後ろを追いかけているのだ。しっかり建てる(正義、愛、憐れみ)ことと、早く建てることは、清い良心を持った人々には常に葛藤である。私達のどれだけの者が近道と、外面を繕うための継続的なプレッシャーによって木やわらの土台の上に建ててきたのであろう？
- 私達は常に自分の「実」「数」「インパクト」を自慢し、そして反射的に、「神様に栄光を！」と付け加えて宣言する。実際、私達を知り、何千回も教えてきた「個人的な実」の概念自体、聖書的に無責任なのだ。
- 私達のどれだけが、自分自身の良心を妥協して、人間の作ったゴールを成し遂げるためだけに、または「怒られ」たくない、公然と恥をさらしたくない、もしくは単純に人を喜ばせるためだけに誰かにバプテスマを授けたことがあるだろうか？
- 「もし月間スタッツシートがなかったら、どうやってミニストリーを成長させることができたろうか？」最も並外れた、初代教会ではどうしていたのか？すべてのリーダー達がバビルスを持っていたのか？
- 私達のほとんどの教会で、決まってクリスチャンは回心者と「バプテスマ」までは懸命に勉強するが、その後は、継続的な成熟したフォローアップという面では、ほとんどなにもなくなる。私達は赤ん坊を生んでも、そのままないがしろにして死なせてしまう。なぜなら、次の赤ん坊がもっと欲しいから！世の中だったら刑務所行きだ。
- セクター・リーダーもしくはファミリーグループ・リーダーは、「成長の神」(もしくは主の日の「主」)をなだめるために、決まって愚かな、無知でさえあるアドバイスを与える。「その結婚式には行くな、ミニストリーがつかずく」「肉親の家族だってことは分かるけど、これは神の家族だぞ。日曜には帰って来い」「もちろん旅行に行ってもいいよ、でも日程は縮めなさい」「君がゴールを立てたんだろ？彼らのバプテスマが間に合うように責任を取りなさい。ただやりなさい。」「本当にその教会に行かなきゃいけないの？うちの数が減るじゃないか。」
- なぜ私達はいつも12月になるとメンバーシップリストを「掃除」するのだろうか？私達は神の時間表ではなく、人間の時間表に従っているという事自体、ずれているのでは？私達がやるべきことは、「なぜこれをするのか」という類いの質問をして、その正確な理由を知るべきである。これはキリストの名や栄光のためではない。もしくはローマ人の神であるヤヌスが私達に命じているのか？
- このようなことを聞いたことがあるだろう「ゴールを設定したならく(あなたが望まなかったとしても) 達成しなさい。」もちろん達成すべきだろう、もしだめであればその結果で苦しむが、少

なくとも愚かに感じるではないか。

- 認めようではないか、どれほどひどく聞こえようが、時々、私達は他の人がミニストリーでうまくやってない時に自分が証明されたときさえ感じる。そしてねたみはこれ以上不信心な考えをもたらす。
- 「もしあなたが良いリーダーで、自分が何をしているのかが分かっていたなら、自分の目標を 8 割から 9 割は予測できなければいけない。」これは私達の謙虚さに貢献するの人間性さに貢献するの？このような類いの傲慢さは良心の侵害につながらないだろうか？本当にそれでより良いリーダーとなれるのだろうか？いや、ただ月末までにもっと多くの「パプテスマ」にはつながるだろうが。
- 私達が自分達の街で「最も大きく」、最も良い教会になるため、そして「上」の人々の要求を満足させるために、他の教会からリーダーを、時には数百人単位で持ってくる慣習は、誰にとってもとても励まされるものとはいえない。その代わり、非常に大きな無礼と分裂を作り出した。すべては数のためであり、それ以上の何者でもない。
- そして最後に、私達の最も熟練して、尊敬される伝道者の一人は「自分の教会の数が減ってしまうので、ミッションチームを送り出したことがない」 そのようにして他のリーダーから数に閉して叱責されないようにしたのだ」ということを認めた。

私は、簡単にもう 100 個の例を挙げることもできる。あなたもできるだろう。ポイントは、私達は自分自身の尊厳と、もしがして自分達の魂までも祭壇で犠牲にしまったということだ。これは神の栄光のために建てられたものではなく、人間の栄光のためである。

神は、彼自身の失われた人に対する愛から、回心者で私達を祝福したのではなく、御自分のために彼らを祝福したのだ。私達が他の人を使ったように、神は私達の自己中心的な野心にもかかわらず、私達を使われたのだと思う。神は失われた人に対する「御自身の」夢を成し遂げられた - ほとんどのものは私達自身のための「私達」の夢を通してであったとしても。

私達は罪深いプライドや不安の願望やニーズを満たすために他の人を評価し、競い、汚し、操作し、こき使いもした - 「私達の上の人」を喜ばせるために、そして「その上の人」も「その上の人」も……。私達の誰もそれから免れない。そもそも何のために？神からの誉れではなく人からの誉れ、神への恐れではなく人への恐れ。

私達は、他の人にし得る神の目から見て最も究極で美しいもの 彼らのキリストとの一致 を個人的な栄光の対象に変えてしまったのだ。私達の心にある本当の動機と意図がある日あらわにされたら、どうするのか？報酬のみならず、私達の救いさえも、危ういかもしれない。

私の経験では、皆さんの多くが、大半とは言わずとも、私の言うことに賛同してくれるであろう。恐らく皆さんのすべてが。しかし、なぜ私達はこの狂気をやめてこなかったのか？なぜ私達の大半がこれほど憎むようになるまでずっと続いてきたのか？心の中で恥とは言わずとも、罪悪感を感じるまで。「今までこうだったから」？いや、これは粉碎すべきもう一つの制度の害悪、私達の信仰制度でのもう一つの柱である。

救われる魂は多ければ多いほうが良い、賛成。しかし誰のためで、またなぜ？私達の尊厳と本当の意図がこれほどおおびらに暴かれて、汚された後に、もはやすべてが神の栄光のためにとはいえない。そう言えば、自己矛盾に陥る。もちろん、皆さんの中には、人を喜ばせることよりも成熟して、自分の心を守ることに尽力し、神の前で「清い良心」を持つ方もいるだろう。しかし、御国全体を見た時に、単純にそうとは言えない節がある。

大部分、私達の大半は一般信徒を私達の「個人崇拜」から、そして他の人から私達の肩に積まれた

プレッシャーから守ろうとしたと思う。しかし、いずれにしても、それは私達の交わりに蔓延しているのだ。

数を「持つことと取ること」 善良さと信心深さを犠牲にしてまでも はあまりにも広範囲に広がり、私達に非常に特有のものであり、それが認められ、告白され、否認されない限り決してなくなりであろう。私個人としては、私達が知るところ、使うところの月間スタッツを送らないことにした。その反動など気にしない。私はやらない。ある伝道者がいびかるように私にこう言った、「送るべきだ。LAが必要としているのだから。」まさに私のポイントだ。

3. 私達の恥ずべき傲慢

良い模範：

- 「私は柔和で謙遜なものだ」イエス
- 「見よ、おまえの王がお前のところにおいてになる、柔和な方でロバに乗り、」ゼカリヤ
- 神の身分でありながら、神と等しい身分であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、」パウロ

悪い模範：

- 「私は金持ちだ。満ち足りている。なにひとつ必要な物はない」と言っているが、自分が悔めな者、哀れな者、貧しいもの、目の見えないもの、裸のものであることが分かっていない。」イエス
- 「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存知である。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。」イエス

ほとんどの場合、私達はひどく傲慢だった。私達は高慢で傲慢な人々の養殖場になっていたと言ってもいいと思う。モーセが傲慢さにおちいった事は非常に高くついた。そしてダビデの高慢さは7万人のイスラエル人の命を犠牲にした。私達のほうが彼らよりまさっているだろうか？

毎年毎年、レンガを積み重ねるように、私達はあまりにも高く、破壊を誘うかのような門を築き上げてしまった。しかし「何があっても」神様が共にいてくださるのを信じるという高慢な決意、また神は私達のどんな決意をも認めるか祝福してくださって来たことと信じてきたことは、私達の現実に対する判断力を著しく鈍らせてしまった。

モーセが民に「私達はいつまであなたにがまんしなければならないのか。」と言って、神に対して罪を犯した時、彼は私達の多くが心に抱えていることを口にした。まさにこういった心理によって私達は動かされている。私達の「私と神」という傲慢さによって、私達は日常的に大人である人々の、顔を殴るようなまねをしてきた。パウロがこのようなリーダーに服従しているという、コリント人を叱責したが、このように「殴る」ことにたいしてこそ、私達は他人には服従させようとするのである。そして、私達は私達をせきたてたり、打ち返そうとする人々をゆるそうとはしない。

パウロは言う。「実際、あなたがたはだれかに奴隷にされても、食べ物にされても、取り上げられても、横柄な態度に出られても、顔を殴りつけられても、我慢しています。言うのも恥ずかしいことですが、私達の態度は弱すぎたのです。」私達も成長した大人である人々を奴隷にし、食べ物にし、取り上げ、顔を殴ってきた。恥ずべき私達の傲慢さによって、私達は大人である人々に彼らの良心に背いてまで従うように強いてきた。パウロなら決してやろうとしないことだ。イエスは決してしなかったことだ。

私達の傲慢さをさらに証明するものは何だろうか。私達の完全な階層とコントロールの仕組みのほかにもたくさんある。私達は個人崇拜を許容するばかりか維持してきた。私達は役職を作り出しては容認し、聖職者と平信徒の間の敷居を高くし、強めてしまった。これはもちろん広く行われているように、人間を高く持ち上げることに繋がってしまった。

「聖書が沈黙するところで、私達は語る」という精神に関しては、私達は何度も「書かれていることを超えて」しまった。

「心の中で...祈った」ファリサイ人のように、私達は神の栄光のためではなく、自分達のために記念碑や計画表を築いてしまった。私達は常に再建しているが自己否認することはない。私達に間違いはありえないからだ。私達は横暴な人間の願いと欲望のゆえに、他の教会を略奪し、乗っ取った。「あなたの街で一番大きい教会でないことは罪」なので、最大で最良の教会でなければならないからだ。しかし略奪された後でさえ、さらなるレンガの数が要求された！

私達は常にイスラエル人の数を数えている。イスラエルの世俗の將軍であったヨアブでさえ、やりたくないと思ったことだ！私達は敬虔な人々を押さえつけ押しつぶすことが容認されるどころか、当たり前とされる文化に発展してしまった。「同じようにやるか、出て行くか」と言われる時、「数を増やすか他の仕事を探すか」が当然のように宣言される時、「従うか、しからずんば死か」こそが言葉にされない真実なのである。神が私達をリーダーとして指名したのには理由がある。私達は「より良い人」なのだから、黙って聞け！というわけだ。

私達は人々の魂を永遠に断罪し、切り落とした。私達が切り刻んでいるのはメンバーシップ・リストではなく、キリストご自身だ。「なぜ私を切り落とすのか？」「いやむしろ「なぜ私を迫害するのか？」と言われても当然だ。これによって、私達は最後の大審判者を演じ、神ご自身の特権を持つかのようにふるまっているのだ。(ヨハネ 15)

私達は私達だけが「真の御国」「真の弟子」であり、「唯一の真の教会」だと教えてきた。私達はそれを信じるばかりか、それを激しく主張してきた。私達は自分が何をやっているか分かっている、私達はこれだけ再建してきた、私達は恵みにより選ばれた残りの者だ、私達は第1世紀以来唯一の教会だ。

私達は計画的に(もしくは、少なくとも設計図から取り除かれていないという意味で)「同意しない」男女を黙らせ、周辺に追いやるような、支配と脅威の文化を築き上げてしまった。これは完全に権力の乱用であり、キリストにある私達の自由に対する裏切りである。私達の教会の中には富めるリーダーが更に豊かになっているところがある。預言者と祭司が自らの権威によって支配している教会がある。「与える」か「出て行く」かと言われる教会がある。DPを持つか出て行くか、といわれる教会がある。LA もその一つだ。でも私達が「唯一の真の教会」ならばどこに行けというのか？もちろん、地獄だ。完全無欠の傲慢さだ。

私達が大量な批判を無視していることには、愕然とさせられる。どうやってキリストが彼らを通して語ってなどいないといえるのか。つまり、キリストご自身はラオデキヤの教会の傲慢さを不快に思い、彼らの交わりの中に自分はいないと、戸口の外に立って、戸を叩いたのではなかったのか？私達は重要なことに関しては何一つ公式な謝罪をしてきていない。

事実、ほとんどの場合、私達は自分達クリスチャンの言うことにも耳を傾けない。もしそうしていたら、このような危機には陥らなかつたらう。彼らの多くは(外部の批判者を含め)私達がほとんど気づかないことも知っている。聞いているようでも耳を傾けないという頑固さは、私達メンバーの間に言い知れぬほどの苛立ち、懸念、怒りを生み出してきた。

聖句にはこういった「支配形態」が一例もないのに、私達は日常的に階層を作り出す。私達はいつも重い重荷を集めては人々に背負わせてきた。あなたがたの多くは、同意や良心なしに他の人の「牧場」や家を好きなように取り上げさせしめたことを、私は知っている。しかしあなたがたはユダヤ教の協議会と同じように、ローマ人式の「それぞれ土地と国を治めよ」を妨げるためなら何でもする。

同じように、私達はいつも「上」を守ってきた。「批判者がそれに気づいたらいけない」もしくは「私達の内の弱いものをつまずかせるかもしれない」という理由でだ。これは聖句に対する直接の冒涇だ。たとえ長老でさえ罪を犯した場合「ほかの人々に警告を与えるため」公に戒めなければならない。

こういった罪のゆえに、私達は人からの賞賛や権力といった報いを十分に受けてきた。「長い衣をまどって」「広場で挨拶されること」。しかしその間に神の息子たち、娘たちは打ちのめされて来たのだ。

エルサレムの動きもアンティオキアの動きもなければ、イエスの動きもパウロの動きもない。私達にはダビデのように「油を注がれた」人物もいなければ、世にとっての神の希望である唯一の人物もない。

これほどの傲慢は本当に「恵みにより分かれた残りの者」の副産物なのだろうか、それとももっと悪意のあるものなのか。また、もしパウロのように私達は「神の恵みによって」こうなっているのだと信ずるならば、なぜ私達はそのようには行動してこなかったのか？なぜ私達はこんな話し方をするのだろうか。

こういった恥ずべき傲慢さが私達の構造的な害悪を生み出し、維持してきたのだ。ロンドンでは、まさに今こういった振る舞いの実を刈り取っている。私達は他者に強いてきた。今度は彼らが私達に強いる番だ。私達はイエスの名によって人を打って来た。今度は彼らが打ち返してくるのももっともだ！

私達を見てみよ。たった 20 年の間に私達は「幸せな少数者」から膨らみきった宗派になってしまった。そしてさらに、現代のカトリック教会以上に個人支配のある腐敗した階層構造を持ち、またファリサイ人以上に虚勢を張った教会になってしまった。少なくとも彼らは白く塗られた墓であり、彼らの傲慢の多くは人には気づかれず、神のみが気づいているものだった。私達の傲慢さは誰にも明らかだ。

4. 私達の金銭への誘惑

- 「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」これをきいて金を愛するファリサイ人はイエスを鼻であしらった。 *マタイ*
- 「願い求めても、与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願っているからです。神に背いた者たち、世の友となることが、神の敵となることだとは知らないのか。」 *ヤコブ*
- 「子は親のために財産を蓄える必要はなく、親が子のために蓄えなければならないのです。私はあなたがたの魂のために大いに喜んで自分の持ち物を使い、自分自身を使い果たしましょう。」 *パウロ*

ヨハネが荒野で宣傳していた時、彼の悔い改めの呼びかけは「物」とそれに対する態度に関してだった。上着、満足、人から奪い取ること。これらのすべては金銭に関するものだ。私達は個人の経済生活を厳しく律する御国に住んでいる。とりわけリーダーに関しては。

しかしながら、人に知られるどんな宗教もしくは宗教的指導者でも同じように、権力と利己的な利益によって墮落してしまえば、金銭や不正な収入の魅力には抵抗できなくなってしまう。それは自明の理だ。私達とて例外ではない。それはイエスの時代の宗教指導者にとってもそうだった。

さらに4つの引用を挙げたい。:

- 「金銭や財産に対する態度は私達の深部にあり、私達の存在そのものとも関係する。」
- 「私達の仕える態度は深く、重大な物語を語る。それが私達の伝記を形作る。ある意味で、どう金銭に関わるかが私達の人生を物語る。」
- 「神だけでは十分でないという人以上に貪欲な者がいるだろうか？」
- 「リーダーの第一の責任は、現実を定義づけることである。」

もしこれらの聖句や言葉が普通のクリスチャンにとって真実であったら、神の御国のリーダーにとってはどれほどもっと真実であろうか。彼らに「世の終わりは訪れた」のであり、彼らは「終わりの日」に生きている。

はっきり言うと、フルタイムで福音を語るものは、福音によって生活費を稼ぐべきである。しかし、どんな生活だろう？それは簡素で使徒と同じようにほとんどおのれのみじめさを自覚するほどの生活であるべきではないか？そのほうが聖徒たちの犠牲を促すのではないか？もしくは傷ついた私達の信用の回復につながるのでは？そして私達の批判者から批判の声を奪うのでは？

これは明らかに私達が聖書の言葉の回復をしそびれてしまった分野だ。そして誰もがなぜかを知っている。年ごとに金銭に誘惑され、屈服することが大幅に、特にアメリカにおいて広がってしまった。イエスご自身の人生と模範はファリサイ人の貪欲にとっての断固たる戒めだった。しかしイエスが彼らの二枚舌を戒めた時、彼らはイエスをあざわらった。私達の反応はどうだっただろうか？私達はあざわらったか？それとも主の御言葉を小さくしようとしたりか？「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。」とイエスは戒めた。

もし私達が「この世代のキリスト教を定義している」のなら、金銭と物欲に関して、私達は何を定義しようとしているのか？もし私達がクリスチャンのリーダーとしての第一の責任が現実を定義づけることであるというならば、では確かに、「具体化できなかった」新約聖書のひとつの現実はこれである。

理由は単純だ。金銭は本当に私達の誠実さと霊的さのリトマス試験紙である。そして聖句の全体の生きた模範と指示に従ってこなかったことは、これが制度の害悪だと私が信じるもうひとつの理由であり、特に欧米において広がった症状であるといえる。(私の貪欲をチャレンジしないでくれたら、あなたの物欲もチャレンジしないよ、というわけだ。)

あなたがたの多くはマークやナディーンをはじめとして、もちろん貴重な例外だ。そして特に第三世界など海外で苦勞している何百という僕はそうである。しかしたいがい、特に欧米では、「天国に近い」という信用はあつという間に地に墜ちようとしている。

金銭は単なる道具ではなく、麻薬でもなく、神なのだ。神格化されるのではなく、拒絶されるべき神である。とりわけ主のフルタイムの僕にとってはそうである。ファリサイ人の言葉を聞いて、キリストは富の神(マモン)の擬人化をした。それに対し私達は立ち止まり、おのれの魂を探ってみるべきだ。しかし用心し、震え上がる代わりに、何が起きただろうか？

いまや黄金のパラシュート、特別献金、給与、無駄な支出、資金の不正流用に関して恐ろしいほど多くの疑問が挙がっている。「聖職者」として私達は信じられないほど素晴らしい研修旅行や、遊びを含むプロジェクトを許してきた。私達は海辺の検収、山での研修、お城やハワイでの研修、海釣りの旅、五つ星のホテル、プレジデンシャル・スイートなどに行った。私達は不必要なビジネスクラスの航空券を買い、バスケットボール・リーグのシーズン・チケットを買いさえた。間違いなくたっぷりとした給与、家や福利厚生を享受している。ピラミッドを上がるたびに「責任」が大きけれ

ば大きいほど　それはよくなる。ぶあつい給与小切手、豊かな雑費。私達は一番良い車、一番良い電化製品、一番良い家、一番良い教育、一番良い住環境、一番良い服、そして一番良い手当てを受けている。

私達は強制的に辞めさせられた人々に黄金のパラシュートを与えながら、何年もの献身の末に「出て行かされた」人々については、もう次のスタッフミーティングでは一言も触れられないことさえある。まるで何か恥ずかしいことでも起こったかのように。私は法の遵守が守られてきたことには同意するが、これは神の金であって、私達の金ではないのだ。外見と貪欲の本当の問題は今や何千もの人々をつまずかせ、私達の霊性に疑念をいだかせているのだ。元 GSL はこのように言った。「おのれの良心に従うことよりも、給料の額やそれに付随する福利厚生の方に高い価値を置いてきた人々に、本当に誠実さを期待することができるのだろうか。」これは物事の制度の深部にいた男の、正直で冷静な洞察だ。

私はたまにちょっとしたぜいたくをしたり、ゲストスピーカーに贈り物を贈るのはいいと思う。それは正しいと思う。個人的には多くの研修旅行に参加し、他のリーダーやミニストリーの気前の良さの恩恵にあずかり、リフレッシュさせてもらった。

本当のことを言えば、大多数のクリスチャンはこのように、苦労しているスタッフに報いることを喜んでしている。彼らは私達の奉仕に感謝し、私達や家族が置かれているプレッシャーを理解している。しかしこれほどの訴えや懸念が広がった今、それを続けることは正しく、責任ある態度であろうか。疑われている時期に富めるリーダーを持つことは正しいだろうか。福音宣教師として誰に対してもつまずきの石を置くことは正しいだろうか？

もしそうならば、パウロが言うように、私達は愛に従って歩んではいけない。そして正直なところ、研修などの費用は公開されたことがあっただろうか。詳細に。それともスライドショーの包括的な「かたまり」に入っているだけなのか？

聖なる信頼は求めるものと与えるもののおかれる。どんな労力をもってしても維持されるべき信頼である。私達が受け取り、使うお金は、その一銭に至るまでクリスチャンたち、とりわけもっとも貧しい人々への愛と尊敬に関わっている。私達はもはやとがめを避けることはできない。私は石を投げつけようとしているわけではない。私も有罪だ。私も深く過ちに気づかされている。

私達は帳簿を開き、支出に関して、特に「貪欲さの臭い」があるかもしれないことに関して、完全に透明にするしか選択の余地はない。マイク・タリファーに言われたことがある。「もし千人の前で口にすることができないなら、それはたぶん正しくない。」いいアドバイスだ。私達はもう一度、法的に正しいだけでなく、キリストに倣い、人と神の前にほめるに足る行いをするために痛みを受け入れるべきだ。具体的な説明責任と透明さ　年末に見せられる円グラフではぐらかすのではなく　によってしか、聖徒たちの完全な信頼と祝福をとりもどし、群れの中のもっとも貧しい者たち、私達の中のシングルマザー、私達を支えるために毎週毎週奮闘してくれる人々、そして血を求めてほえたける批判者に対して、私達の良心のとがめがなくなることはないだろう。

私達は共産主義者の指導者が美しい別荘を持っていると知って、警戒しないだろうか。また厳しいイスラムの指導者が村の誰も持たない中で、水道やエアコンを持っていたらどうか。リーダーが「最高水準」に近い生活をしたたり、二重規範や世への愛を持っているならば、どれほど教会は今後も激しく責め続けられることだろう。少なくともこれは祭司エリの息子の罪の一つではなかったか？

聖書の言葉どおりに実現するのは難しい。それは分かる。しかし具体的に実現しなければならぬ。もはや選択の余地はない。あまりにも多くのことがかかっている。真偽はさておき、私達の多くはセールスマン、白く塗られた墓、アハブの食卓につく預言者であり、彼らを雇っている、という印象を与えている。福音の信頼が傷ついた今、変わる以外に選択肢はない。

私にも子供があり、彼らにベストを与えたい。これは親としての自然の本能だ。しかし彼らにとって本当にベストなのは何だろうか？ 家族でさえも簡素で質素な生活を送ることが、フルタイム・ミニストリーに入るものが飲まなければならない杯ではないだろうか。

もっと過激に考えれば、使徒たちに付き従った妻たちは、夫が説教できるようにその生活を支えたのではなかったか？（1 コリ 9:1-2）なぜだったのか？

あと数デナリでさえも、教会に重荷を負わせることを拒んだのはなぜだったのだろう。それは個人的な信頼を守り、非難されないようにするためだ。これはほとんど研究されたことのない、宣教の模範だ。これは私達の教師に考慮の種として残したい。

兄弟姉妹、私達は自分に正直に尋ねるべきだ。私はばつが悪いのか。責められているのか。弁解がましいか、高慢か。もっとも貧しいメンバー、未亡人、シングルマザー、批判者さえも一人残らず自分の家に招き、彼らの犠牲により支えられている自分のライフスタイルを正当化しようとするのは恥ずかしいと思うか。

正当化できるとしても、相続したのであっても、偉大な奉仕の実かなんかであっても、永遠の王国の祭司として、もし私達の給与やライフスタイルが数人以上の不满なメンバーに批判されたり、一般信徒にとってどんなかたちでもつまずきの石であるならば、私達はいくつか真剣な決断をするべきだ。

私達は正直に自分に尋ねるべきだ。より大きな社会的影響力、もっと金銭を求めることの裏にどんな理屈があったのか。必ずしももっと労苦しているからではない。より大きなプレッシャー、恐らくは、であったとしても、こういった給与体系は使徒の教えや模範へのまさに侵害だ。パウロ「何も持っていないようで、すべてを持っている。」ペテロ「金銀は私にはない。認めようが認めまいが、もし金銭がどんなかたちであれ私達の動機であるなら、イエスは言う、私達は「十分に報いを受けた。」と。

リーダーとして私達は他の人に勤めてきた、いや、実際には要求してきた霊的さと犠牲の模範となるべきではなからうか。（聖句は自分で埋めて欲しい）

- 私達自身の犠牲的な献金と生活において？
- 私達の平等への願いにおいて？
- 私達自身が真に正義を行なうことにおいて？
- 満ち足りることと、簡素さを喜ぶことの模範になることに？
- 教会の重荷を減らすためにできることはなんでもすること？
- 何も無駄に使われないように？
- 自らを貧しいものとみなし、彼らを侮辱しないこと？
- 「一切」の貪欲から逃げ去ること？（性的な罪については容赦なく実行するわりに、貪欲に関しては露骨なほど偽善的だ。）
- 私達自身もまず何よりも弟子であると証明すること？
- 私達はよりよい国に属していると「見せる」こと？
- 商業主義、消費中心主義という疫病に弟子がどうやって抵抗することができるかを実例をもって説明すること？
- 批判者の矛先を収めさせ、本当の意味でとがめから逃れること？
- キリストご自身の貧しさや簡素さに倣うこと？
- 私はキリストと共に十字架につけられている」として「世は私に対して、私は世に対して十字架につけられている」という真理を体現すること？
- 明らかに使徒的な行いと精神を回復する。たとえば「貧しいようでいて多くを富ませ」「大いに喜んで自分の持ち物を使い、自分自身を使い果たしましょう。」「私は当然持っている権利を用いない」など？

もし私達がこれほど自分達のクリスチャンからお金を得るためにここまで押しつたりしなかったら、まだまだこれは神にとっても大きな意味があったはずだ。しかし継続的な頼み方と強制的な「集め方」のせいで、その意味を失ってしまった。

私達は尋常ならざる金銭的な犠牲をメンバーに要求してきたが、それに比して私達自身にはほんの少ししか要求して来なかった。私達が何が「残っているか」によって測り、何が「与えられた」かによって測れないならば、である。

イエスはファリサイ人の「明らかな」貪欲さ、彼らの「隠れた」貪欲さ、そして彼らが貪欲さを「否定」しつつ実際には二枚舌であることをあらわにし、呪った。イエスはこれを「富の誘惑、その他いろいろの欲望」とよんだ。かれは相続のようにその源が合法的な場合でさえ「あらゆる貪欲」に対して気をつけるよう命じた。

よく考えてみて欲しい：貪欲さは新約聖書においてクリスチャンが交わりを絶たれる理由となる数少ない罪の一つであり（コリント5）ながら、人類の歴史でもっとも豊かで消費者志向の国である米国において、貪欲のせいで交わりを絶たれた人のことを一人でも聞いたことがあるだろうか。貪欲は偶像崇拜であり、欺きに満ち、「聖なる者たちの相続分」を失わせる。実に非常に力強いものだ。

妥協を赦さない

これらすべての構造的な組織による害悪はもつれ合い、絡み合っている。これは万人に対し「公式」に発表されない限り、私達の教会に存続し続けるだろう。私達の宗教的文化は、あまりにも密着して体制順応的なので、妥協を赦してはならない。もし私達が「いくつかの点」を選択して「妥協しない」という態度でなければ、問題は何も変わらない。

そうした場合は、その影響を食い止める唯一の方法は、聖書の自主性である。（後ほど詳しく説明）先にも述べたとおり、もしこのような組織による害悪を継続するならば、私は警告として言うが、私達の個人的な数にも危うくなるだろう。まして私達の一致や個人的な信憑性は言うまでもなくである。私達は例外であって免れるのだから、神の掟に従うよりも優っているなどと悠長なことを考えてはいけない。たとえ過去にどれほど神に用いられたとしても、である。それこそまさしくプライドの実だからだ。自分自身に直面しようとせず、核心的な事柄を聖句によって戒められても、自己満足によって反抗的になる時、それは霊的に非常に危ない。

そして偽善は一巡して戻ってくる。私達は革命を好むが、自分達を転覆させるものは好まない。私達はベレア人がパウロに質問したことは誉めるが、私達に対する質問は好まない。ヨシュアの大膽な精神は愛するが、私達の骨を掘り起こしさらさないものに限る。私達はオビニオン・リーダー（ご意見番）を欲するが、その矛先が自分達に向かうことを欲しない。盲目のファリサイ人を非難するのは大好きだが、自分達の内なるファリサイ人は見ようとしぬ。キリストの簡素さ「必要なのは一つだけである」や使徒の「物乞いのように、多くの人を富ませ」を好むが、自分達にとって不快でないものに限る。

サドカイ派やファリサイ派の人々への接し方は、食事を共にするほど忍耐する時もあれば、怒って神殿をひっくり返す時もある。今こそその時だと私は信じている。私達の過ちと罪は、激しく攻撃され、転覆されなければならない。キリストが当時の宗教的組織に敵対したように、現在は私達の宗教的組織に敵対なさる。あまりに多くのことが行き詰まっている。私達の戦いは、血肉を相手にするものではなく、サタンとその拠点である。臆病になっている場合ではない。穏やかに審議する時でも、暗闇をのしる代わりにろうそくに火を灯すような時でもない。地上に火をもちたらずである。

私達は謝るべきである。問題を先延ばしにしたり回避したりすべきではない。過去を認識しない限り前進することはできない。歴史の醜い部分を直視しない限り明るい未来はあり得ない。現在でも世界中の教会では、多くの変化がもたらされているが、過去を認識せずに前進しようとするれば、問題はいつも私達につきまとうことになる。公に誤ることの目的は何か？神と人の前で自分自身をへりくだ

らせるためである。心碎かれ、自身の罪に恥じ入ることを促すためである。真実の悔い改めと回復を証明するためである。私達の愛する弟子たちに対し、自分が「理解した」ことを証明し、傷つき苦しい思いを持ったクリスチャンとの距離をいくらかでも縮めるためである。正当で容赦ない批判を広めるためである。しかし何にも増して、私達の神を喜ばせるためであり、そして願わくば、その痛みや傷、良心の呵責によって私達の「組織」の中ではもはや生きられなくなり、散らされた人々が再び戻って来られるためである。

広範な問題と懸念

ここにその他の懸念をあげたい。そう思っているのはもちろん私だけではない。てごわいが正直な疑問、受け入れられている神学論をあげ、議論の場に提供したい。順不同。

1. 私達は 25 万人以上の男女を教会から離れさせてしまった。もちろん多くはフォールアウトした。恐らく大多数は。しかし何万人もの人々はそれぞれ神と共に去った。私達は単にそれを認めていない。私達は軽率にも、また多くの人を傷つけ、がっかりさせつつも、誰でも自分達を離れるものは、理由が何であれ神からフォールアウトしたのだと主張してきた。そんなことはあり得ないし、実際不道徳ストレスなことだといっている。公的に認めないとしても、私達は誤って何百もの人々を「切り落として」しまった。全員が神を離れたのではない。私達の交わりから離れ、それぞれの交わりの場を作るために離れた。真実を認めようではないか。何千もの人々が、疎外され、叱責され、誤解され、疲れはて、やむなくそれぞれの良心に従い出て行ったということ。さらに厳しい、容赦のないリーダーシップによって散らされた人々もいる（エゼキエル 34）。
2. それに関連して（もちろんそれだけが理由ではないが）いまや反対者、批判者による完全なサブカルチャーがある。これは私達が自分達の誤りと罪を公的に認めない限りなくなるまいだろう。
3. 私達の動きのリーダーシップ、特に「柱とみなされる」リーダー、また直接「その下の」リーダーたちに対する信頼は危うくなってしまった。しかしさらに緊急なことは、各地域のリーダーに対する信頼も危うくなっており、柱のリーダーと地理的に近ければ余計にそうであるということだ。（ロンドンは今のところそのもっとも声の大きく、怒りに満ちた証拠である。）
4. 個人崇拜がとうとう私達を犯し、私達の未成熟さ、人に気に入られたいという性質に付け入り、おとしめた。なぜこれが起きるまでこんなに長いこと待ってしまったのか？そもそもなぜこれが始まるのを許してしまったのか？
5. 程度に差こそあれ、私達は勇気と良心ある者としてリードして来なかった。傷つき裏切られたクリスチャン、彼らは私達のリーダーシップに信頼し、従ってくれたが、彼らの目に私達は今や臆病者で、ひいきされ、おべっか使いで福音の売人だと映っている。（ロンドンはこの気分をまさに表出させているが、皆さんにもよくお分りのことだろう。）然り、私達は自分達のつける傷、律法主義、思いやりのなさ、そして数への執着を認めたが、それ以上に、なによりも恥ずべきことは、私達はそれについて何もできなかった、とうことだ。いったいいつまで神の息子、娘たちは傲慢な者による手荒な扱いを耐え忍べばよいのか。「神の人」は臆病で、神の子供達を救い出すために何もせずにいるのか。さらに恐るべきことだが、神はいつまで忍耐すればよいのだろうか。私達は何よりも「私達の羊」の権利とニーズのために立ち上がった。たぶん何よりも非難されるべきことは、私達はどこでも同じように、羊飼いの側に回り、羊の側に立って来なかったと言うことだ。何と恥ずべきことか！！
6. 残念なことに、わが預言者達のあまりにも多くは王の食卓でもてなされ、不快さ、経済的な不安や人からの賞賛の温かさをうしなう危険を冒さなかった。世界中のクリスチャンは敬虔な人々が、自分達が面倒を見ている人々のためにとって正しいと信ずることをするほどには愛や良心がなかった

ことに傷つき、苦々しいほどに落胆している。ではどうしたらできるのだろうか、実際のところ？ 私達のミニストリーのスタッフも傷ついている。彼らも「制度」内部から来る自己中心的な独裁や悪弊の犠牲者だ。彼らは上からも下からも、両面砲火を浴びている。これはきびしく、また公正を欠くように聞こえるかもしれないが、ロンドンでは少なからず特定のスタッフをクビにしたがっている人がいる。スタッフ全員に辞めて欲しい人も多い。彼らの言い分を引用すれば、あまりの失望感のゆえだ。彼らはこき使われ、裏切られた、と感じているのだ。

7. 私達はたやすく教会の中に、喜んで他人の面目を失わせることをするような「超使徒」や厳しく独裁的なリーダーに我慢している。それは都合が良かったり、誤った対象に対する忠誠心があるからだ。耳が痛いかもしれないが、「彼ら以外にできるひとがない」からだ。しかしリーダーがいない（そして聖霊の慰めがある）教会のほうが、悪いリーダー（聖霊の火を消してしまった）のいる教会よりは絶対がいい！何が私の心を痛めるかといって、私が愛し、尊敬する人々が「忠実さ」「好都合」「長年仕えている」「お互い世話になった」といった理由で人を選び、なにが道徳的に神に喜ばれるかをまったく無視していることほどのことはない。

8. 残念ながら、いわゆる LA ユニティー協議会は、誠実で偉大な意図があったにも関わらず、私達の本当の問題 制度の害悪 をすぐに正式に表明することをしそびれてしまった。LA ミーティングの前にも私達の GCL は自分の気持ちをごのように表現してくれた。

この動きはもはや茶番になってしまった。ローマが燃えているのにトップリーダーが集まってガバナンス（組織管理・統治）について一週間かけて話し合う。離れた 25 万の魂が私達の教会の土台そのものに対して叫びを上げているのに、その声を集めても、公式な謝罪につながらず、世界中のリーダーを集めることほどには。

会議に参加した多くの皆さんはご存知のように、皆さんの公式なアナウンスメントは事実の追いつきであり、かなりの疑念、場合によっては皮肉をもって受け止められている。「またも引き伸ばし、充分深くない、充分中身がない。何が本当に変わるというのか？」「なぜまだやつらに信頼しななければならないのか？」「彼らはそもそも立ち上がってくれなかった、今は徳と勇気があるのだとなぜ信じなければならないのか？」

私達の一致が失われ、関係が機能していないのは「教会の霊的なニーズをはるかに超えてしまった」構造的なモデルから来ているのではなく、現在も進行している、高慢で自己中心的な、墮落した人間によって保たれ、支配されている腐敗した階層の結果なのだ。

なぜ見えないのか？私達は制度の害悪を容赦なく、痛みを持って神学的にも検討し、さらけだすまでは決して真に一致することはできないだろう。制度の害悪こそが私達を分断し、これからも常に分断するであろうものだ。私達の闘いは骨肉に対するものではなく、悪霊の牙城に対してだ。ファリサイ人でさえ、みたところ一体化したグループのようでも、決して真に一致してはいなかった。パウロはファリサイ人の中のファリサイ人だった。しかしかれ自身のことばによれば「悪意とねたみを抱いて暮らし、忌み嫌われ、憎しみ合っていた」のである。

証拠：正直なところ、皆さんの多くはまだ怒っており、中傷し、「出ていってこれこれをしよう」と思い、「あれこれを持ってこよう」としているのはほんとうではないか？皆さんの多くは正直なところ、あなたの輝かしい「地位」を失わないように、支配と強制的な体制順応のためのあなたのニーズを失わないように必死にしがみついているのではないか？そして、それと同じように、「真剣な説得」がないかぎり、どれほど問題があろうと、どれほどそれが長く続いていたとしても、ほとんど誰も辞任していないのは本当ではないか？私はそれが真実だと知っている。私は何人かの皆さん自身の声を電話で聞いた。問題は、ではなぜ、それが本当なのだろうか？

構造的な変化、地方自治の拡大、そして少数の名だたるリーダーの辞任、正直な話し合い、公開討論、それだけでは変わらない。私達の問題はそれよりずっと深い。あまりにも深く、実際のところ、

邪悪でさえあり、「悪霊を祓う」必要があるのだ。構造的な、制度の害悪は、私達を、私達の人間関係を、私達の道徳心を、そして私達の一致を絞め殺してきた。なぜそれが見えないのか？なぜそれを見ようとしぬのか？それは痛みを伴い、非常に失望させられる。いくつか「地位」や名前を取り替え、6ヶ月間の「問題と協力のための」協議会を開いたところで無意味だ。

9. 私達の教会には「聖職者と平信徒」の著しい、時には極端な差がある。「すべての信者は祭司」かどうかは大いなる疑問だ。(平信徒の)声が聞かれないこと、現場の状況に対する理解と共感がないこと、スタッフ以外に代表権、意思決定権がないこと、情報公開と透明性が欠けていること、給与体系の格差と独裁的なリーダーシップ・スタイル、そしていまいまいましい最前列の席。これらのゆえに格差はかつてないほど広がってしまった。

10. なぜこれほど多くのトップリーダーは悔い改めに時間がかかっているのか？それとも「ディサイプリングの動き」の先導者でありながら、自らはディサイブルされることを拒んでいるのか？なぜ何年もかかる者がいるのか？ワールドセクター・リーダーの「ディサイプリング・グループ」は何をやってきたのか？なぜ私達の御国の教師や長老たちは十分に預言者的ではなかったのか？それともなぜ私達の GSL のディサイプリング・グループは十分に勇気がなかったのか？私達自身を守り、対象を誤った忠実さは自己満足に寄与してこなかったか？「あなたには分らない」私達は「骨抜きにされ」「無力で」「やってみただけれど私達にできることは何もなかった」「その活力にあずかるにはその部分にならなければならなかった」そして「馬鹿正直ではだめだ」これは私達に対する二重の告発である。これは私達が恐れと威嚇により支配する宗教文化であると同時に、完全に上に対しては臆病者であり摩擦の回避者の文化である、ということを示している。

この二重規範と二枚舌はみつともない。私達はノンクリスチャンには大胆に変わるように期待する。家族、キャリア、人間関係や中毒を数週間で手放すように期待し、バプテスマを受けるためにはそれらを要求しさえする。しかし私達のトップリーダーには悔い改めに何年も与えられながら、権威ある地位にとどまり、私達の人生をチャレンジし、「変える」！

11. キップの辞任の手紙は、誠実ではあったが十分ではない。彼の手紙は非常に感動的(私は2、3日泣いた)だが、彼の個人的な生活と、人としての失敗は一番の問題点ではない。誰もが罪を犯す。偉大な神の人と云えども、多くのリーダーは倒れ、これからも倒れるだろう。本当の問題は私達がどのように物事を築き上げ、維持してきたかであり、キップが倒れたのも聖書から見て不可避だったということだ。問題の核心は、キップは具体的な「私達の制度の罪」に一度も言及していないということだ。彼はそれらに言及しなかったのであり、それらを否認していないことは言うまでもない。

これはもはやキップや少数の主要人物の辞任では済まない。私達の活動の将来と存在意義が試されているのだ。私達の階層、「正式に決められる」ディサイプリング構造、律法主義、そして制度の害悪は失敗だと認められるべきである。キップを含む私達の誰にとってそれが痛みを伴うものであってもである。これは偉大で真摯な宗教的な実験であったし、神は私達の誤りや危惧にも関わらず働いたが、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れられるべきだ。

12. 私達が「唯一の真の教会」である(もしくはだったことがある)と教え、信じられていること。この主張は明らかに傲慢であり、必然的に無礼である。なぜそれがわかる？大目に見ても私達は唯一普遍的なキリストの教会 その体がキリストの地上における目に見える具現である の一部であるに過ぎない。私達は教会である、それには同意する。そして私達は真の教会である、それにも同意する。しかし「唯一の真の教会」を国際キリストの教会の会員リスト、私達の組織的な領域と等しいとみなすことは、間違っているばかりか異端でさえもある。

私達がこのように教えていることをメディアや批判者には公的には否定するかもしれないが、私達の多く、特にリーダーでない信者はこの確信が生死の問題として固執しているのだ。これを私は何度も何度も聞かされてきたが、それは何をもってしても証明はできないし、完全に傲慢であり、神学的

に見ても正しさは証明できないし、この教義は否認されるべきである。立場を明らかにするために言えば、私は「他の教会も救われている」と言っているわけではない。なぜなら今までも真の教会は今までも今も唯一だからだ。しかしその組織的な領域を知ることにはできないし、これからもできるようにはならないだろう。

要約すると、私達は教会であるが、国際キリストの教会が「唯一の真の教会」とは言えない。私達はクリスチャンであるに過ぎないが、私達が唯一のクリスチャンであるとは言えない。私達の会員リストは、目に見えないキリストの霊的な身体 of 完全な体現、もしくは神秘の構成要素ではない。

13. 私達は宗派を造り上げてしまった。私達はわずか20年で「みずばらしい兄弟の一同」から国際キリストの教会に至ってしまった。これを聞くのは辛いことだ、とりわけ「御言葉の勉強」で否定しているからだ。でもそれは本当だ。そして私は私達の多くが一人で考えていることをおおびらに語ってに過ぎない。私達は「国際キリストの教会」であり、認められた創設者であるキップがいる。(KNN上で作られたこの声明が放棄されるまでは、そのように教えられてきている)「私は'ICOC'にいる」は今やキャッチフレーズである。(個人的には「私の救い主はJ.C.です」というのと同じように無礼だとは思いますが、私の言いたいことを立証している。)

私達には明確な階層がある。私達には自分達の本部がある。私達には固有の名前や用語がある。私達には独自の神学があり、はっきり誰がメンバーであり、誰がそうでないか知っている。程度の違いはあれ、どの教会でも同じバターン、同じ伝統に従っている。そして同じ制度の害悪は明らかに広がっている。私達はほかの人々と交わりを持たない。私達には「公式」のウェブサイトがあり、「公式」の出版物があり、「公式」のニュースネットワークがあり、「公式」の委員会がある。私達は宗派になってしまった。私たちは巨大な問題を抱えながら、何も無いふりをしている。これはよいことではない。

私達は「非公式に」認められたリーダー、みずばらしい兄弟の一同、世の屑、ゴミから、「1スーツケースチャレンジ」から、個人的な確信と自発的な犠牲から、完全に自発的な特別献金から、そしてほとんど毎週の責任や月末のスタッツもなかったところから、壁に3ドルの地図を掛けて、外国に教会を建てるべく狙いを定めていたところから、一つの動きに、多教会の家族に、ファミリー・ビジネスに、企業のように、そして完全に膨れ上がった宗派になってしまった。何が起こってしまったのか？私達は真正な聖霊に導かれたリーダーシップを、霊的でない、ほとんど企業のような独裁体制と取り替えてしまった。

14. 私達の動きは「御国」ではない。御国は教会や人間のどんな動きよりも偉大なものだ。私達はクリスチャンであり、御国の特権的な市民であるが、それだけである。私達はバプテスマによって御国に入れられ、王を抱いているが、「神の国」は宗教の動きやメンバーシップ・リストより、無限に、永遠にまさるものである。なぜ私達の教師たちはこの件について否認したり議論を強いてこなかったのだろうか。

15. KNNは、時には非常に励まされることもあるが、容認されている習慣や信仰の制度をさらに実行させるためのプロパガンダの道具とみなされている。探求のためでなく、硬直化のためだ。真の一致ではなく、体制順応だ。恐らくKNNほどに、個人崇拜に貢献したものはないだろう。

16. 強制的な献金は広範に行われている。もちろん喜んで与えたい誠実で気前の良い弟子たちはいるが、それでも献金を集めるに当たっての私達の教育は、心や、愛の献げ物や、リーダー以外のクリスチャンから「回収する」ことが彼らに与える霊的なインパクトなどに対する真摯な思いやりには基づいていない。それはいちばん大切なことではない。アカウントビリティ、厳しい精査、フォローアップや人からのプレッシャーがその日の指示である。クリスチャンが言いくるめられて「倍額」払う時、十分の一献金しているかどうか調べることに、誰もが無知なように公式のスプレッドシート上に分類し、セクター・リーダーが「把握できる」ようにしておくこと、これらすべては私達が作り出し

た予算を維持するためであり、それは強制的だ。私達の予算と支出が高貴なものであるとなかろうと、こういった人為的で強制的な献金のやり方は（新約聖書の）新しい契約の精神からは著しくかけ離れている。それを皆さんも私と同じように知りながら、なぜこれ続けているのか？どうやって「金を集め」「予算に到達する」かは、発展して私達のもっとも侵略的で恵みを殺す行いになってしまった。そしてそれが言葉にされない悪感情を生み出してしまった。

金銭的な高潔さという意味では、ロンドンのもっとも質素で責任感のあるミニストリーになったと私は思っている。ほとんどの西欧のリーダーに比べても、ロンドンのスタッフは非常につましく、どう見えるかも良く気を使っている。それでも金銭に関する反感は大きく、容赦なかった。ある者はリージョン・リーダーからの言葉によって、自らを「神の聖なるミッション」に参加しているとみなしている。なぜなのか。恐らく献金はまず「献金を集める」ための強制的な方策の副産物になり、毎週、毎月の説明によるプレッシャーから生まれたものであり、喜んで与える心からは来ていないのだ。このリーダーシップは教会の犠牲による自分のライフスタイルを正当化するにあたり、かなり守勢に回っている。

喜んで与える者は、たやすく赦し、それほど気にもせず、リーダーシップのライフスタイルや支出を弁護してくれさえする。しかし強制的に与えさせられ、重荷を感じている者は、また献金できなかった時に罪悪感を感じさせられてきた人々は、どんな金銭的な「外見」に対しても、また不適切と思われることに対しては激しく攻撃を返している。事実かどうかはさておいて、それが現在起こっていることであり、そうなって当然だ！

コリント8、9章から以下の聖句を見てみてほしい。順番に挙げる。「与えられた神の恵み」「満ち満ちた喜び」「惜しまず施す豊かさ」「自分から進んで」「奉仕に参加させて欲しいと、しきりに私達に願い出たのでした」「彼らはまず」「この慈善の業」「あなたがたの愛の純粹さを確かめよう」と、「進んで実行しようと思った」「進んで行く気持ち」「主ご自身の栄光 - を現すように」「だれからも非難されないように」「惜しまず提供された」「あなたがたの愛の証し」「私達が抱いている誇りの証し」「あなたがたの熱意」「渋りながらではなく」「惜しまず差し出した」「不承不承ではなく強制されてもなく」「こうしよう」と心に決めたとおりに」「喜んで与える人を神は愛してくださる」などなど。このように深く個人的で霊的な与え方は私達のようにプレッシャーを与えるアカウンタピリティーの仕組みが横行するところでは不可能である。以上。

「責任を課さなければ、彼らは与えない」ならそれまでだ。説教し、教えよう。必要があれば命じよう（テモテ6）。私達の予算は、誠実な与え方に基づいたものにし、良かれ悪しかれ私達自身の計画を推し進めるために設定した予算に基づくのはやめよう。ひとたび与えられる額が決まったら、それに基づいて予算は決定されなければならない。その逆ではない。特別献金が遅れた「教会には課金する」可能性について話し合おうとするほど無神経な者もいた。こういうところからあらゆる革命は始まるのだと思う。

17. 私達は特別献金のゴールや予算によってメンバーに重荷を課してきたが、無駄遣いをせず、本当は必要でないにそれほど贅沢に使うのをやめていたら、もっと説明責任を果たし、フルタイムスタッフ以外の意見に耳を傾けていたら、その予算は大幅に減らすことができたはずだ。

18. リーダーのニーズを満たそうという熱意に関しては、西側のリーダーにくらべ、第三世界のリーダーに対して不公平である。私達の第三世界の仲間は私達と同じような医療給付はなく、給与も社会保障もなく、同じような退職金はまったくない。このような不正を正すためにできることは何も無いのか？正義はどこにあるのか？平等はどこにある？思いやりはどこにある？

19. 順応は一致と違う。バプテスマのヨハネとイエスの例をとってみたらよい。片方が葬送歌を歌えばもう一方は箏笛を吹く。一方がイナゴを食らえばもう一方はぶどう酒を飲む。この2人の偉大な

同時代人の間に、お互いをそれぞれに順応させようという意図はかけらもみられない。ふたりとも同じメッセージは説教していた「悔い改めよ」。

もしくはパウロとバルナバの間の激しい論争を考えてみて欲しい。順応への強制がないどころか、聖霊にインスパイアを受けた使徒とそうではない者がいた。ユダヤ人と異邦人との間でも使徒同士の間でも順応は迫られていない。ところが私達は自らに順応を強制し、世に対してわれわれは思いも盡も一つであると自慢をしてきた。真の一致は完全に自由に基づくものだ。愛と互いへの尊敬に基づいており、規則や地位によって引き寄せようともしていない。

真の誠実で聖書的な一致は、祈り（ヨハネ 17）謙遜や個人的な明け渡し（エフェソ 4）によってなされるべきであり、書かれている範囲を超えず、一人の人を他の人と比べて持ち上げたりせず（1 コリント 4）神への畏れに基づくべきだというのが命令である。そのほうが成し遂げるのは難しいのは言うまでもない。しかしそれは本物であり、作り出されたものでも強制されたものでもない。真の一致は神に与えられた違いを賞賛し、意見やリーダーシップのスタイルの違いがあっても、交わりを妨げない限り認められる。それこそが「弟子であることを皆が知るようになる」唯一の一致のあり方である。強制された順応はつねに反抗を生み出すのは明白だ。そして年を重ねるほどに私達はそれを理解する必要がある。

20. 現在ほとんどの教会で実践されている形としてのディサイプリング・パートナーという概念は失敗に終わった。恐らくそれ以上に、“小さなリーダーたち”が大勢いるディサイプリングの階層は他の何よりも多くの害、心痛、批判を生じさせたのではないだろうか。何千人何万人もの訓練を受けていない“霊的ではない”弟子の間で、アドバイスは許可になり、意見は命令になり、神から与えられた自由の尊厳と“権利”は拒まれた。私達の階層と「バプテスマが一番いいこと」という神学の性質と私達の罪深い性質が混合された時、多くの場合は悲惨な結果を生んだ。パウロは「私は、だれに対しても自由な者です」と言い、コリントの信徒には「あなたがたは、身代金を払って買い取られたのです。人の奴隷となつてはいけません」と述べた。これは単なるアドバイスではなく、神の命令である。ガラテヤの信徒には「この自由を得させるために、キリストは私達を自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷のくびきに二度とつながらねはなりません」と記した。

ディサイプリング関係で、私達は忠告し、懇願し、経験からシェアをし、勿論、聖書を開いてもいいが 最終的には、それぞれのクリスチャンは「**恐れおののきつつ自分の救いを達成**」しなくてはならない。意見の域にある事柄について押し入るように干渉することはシンプルに容認してはならない。神の人はアドバイスを求めるが別の神の人は絶対にアドバイスを強要しない。当然、何人かは倒れて悪い決断をするだろう。時にはとんでもない決断をするだろう。だが、それは彼らの決断であって、私達のものではない。私達は日常的に他の人の自由、他の人の人生の裁き手となっている。しかし、どうして私達に裁くことができようか。エチオピアの宦官は私達の弟子の規準をすべて破っている。彼は全身から水が滴っている状態で、フィリポはすぐに連れ去られた。私達は神より知恵があるのか。神の霊よりも有能なのか。

私達は善い志で始めたが、制度は触れるものすべてを汚染していた。誠実に羊を守ろうとして始めたことがコントロールする仕組みに退化した。これについては疑いの余地がない。私達の制度的なやり方を維持するために強要されたディサイプリング関係の必要性はあまりに重要だったために、それに対し「ノーサンキュー」と言うことは私達のいくつかの教会では追放を意味した。キップ自身のLA からの言葉は今や世界中に知られている。だから誠実なクリスチャンは「ディサイプリング・パートナーを持たないことは罪でしょうか」と尋ねることもできなかった。実際、罪なのだろうか。

過去にされたアドバイスで恐ろしいものもあったが、多くは、単に主において彼らの「上」にいた者の自己中心的なゴールや「より高いレベルの課題」を反映したものに過ぎなかった。また、クリス

チャンは大体において別の人の干渉なしには神を喜ばず能力を持たないか持てないという信仰！どんなによく捕らえようとしても否定しようとしても、これが多くのクリスチャンが現実と受け止めていることであるゆえに信じて実践していることである。

しかし、聖書は何と言っているだろうか。神は「私の掟に従って歩ませ、私の裁きを守り行わせる」。私達は「王の系統を引く祭司」「善意に満ち」「互いに戒め合うことができる」「分別のある者」、「自分で判断」しなくてはならず、「自ら使徒と称して実はそうでない者どもを調べ」ることができ、そしていつの日か「世界と天使たちを裁く」と記されている。教会の「疎んじられている人たち」でさえ信者の間に生じた大きな論争を治めることができる。私達は王であり祭司であり神の子であり、いかなる人間に依存する必要もない。私達は神の聖霊で満たされており、神の御言葉を持つ。私達には偉大なる祭司、仲介者、父への弁護者がついている。

私は、霊的な「ディサイプリング」関係を通して大変すばらしい善が成されたことは否定しない。しかし、形式化された権力にあふれた組織としては、必ず失敗に終わるし、取り除かれなくてはならない。なぜか。それは「主の霊のおられるところに自由」があるからである。

21. アメリカ支配 (Pax Americana) に終止符を打たなくてはならない。

22. 全般的に、私達は羊ではなく羊飼いを守ってきた。忠誠心の必要性は理解できる。人々は私に特別に面倒を見てくれたり、危機から助け出してくれたり、セカンドチャンスを与えてくれたり、落ち込んでいた時に励ましてくれたりした。しかし、私が言うのは個人的な罪や家族の問題（これも深刻となる場合もあるが）についてはない。むしろ私は、害を与え、独裁者ので、過度に厳しく、圧制し、屈辱を与え、利己的野心を追求し、人の言うことを聞かず、傲慢であるリーダーを認め続けることについて言っているのだ。あるいは、真の悔い改めがないまま、セカンドチャンスを与えるために他のミニストリーに移すことについて言っている。これは容認できない。不幸なことに、概して長老の役割は他の何にも増して渉外係と伝道者を守るものになった。

新約聖書は様々なリーダーを描いている。一部は好く一部は悪いリーダーである。全員がリーダーと分類されるからといって弁護されなくてはいけないわけではない。事実、数人は公の場で名前が挙げられ、公然と告発された。盲目的なサポートは非聖書的である。使徒の時代のキリスト教世界では、「唯一の真の教会」内部には多くの反キリスト、ディオトレフェスやヒメナイ、「超使徒」や逸脱した使徒、偽りの使徒、律法主義者、ユダヤ人至上主義者、ファリサイ派、[数多くの]偽教師などが到来するところだったのである。彼らは一世紀の教会で交わりの輪の中にいた男性たちである。私達の交わりについても言えることだろうか。「あなたがたのなかから」立ち上がる飢えた狼に十分注意するべきではないだろうか。

23. 全般的に、私達は神よりも人を恐れている。神を喜ばせようとする以上に人を喜ばせようとする。その証拠はどこにあるのか。どのようにこれほど多くの罪が、いわばカルトのような慣習がこれほど長い間善意ある人々の理屈や良心を超えて広く存在することが許されたのか。私はあなたが内密に、電話で、親しい友達と、あなたの妻と、あるいは心の中で言っていることを知っている。私と同じことを憂慮していたがどうして今までその問題について発言しなかったのか。なぜ前に出ることができなかったのか。人に対する恐れゆえである。

24. 私達が長年かけて培い、形式化し、あるいは組織化したことで、聖書で明確にされている事柄以外は、それが政略的な役職名や権威ある職務についてであれ、神学的な方法や文化的慣習などについてであれ、常に優れた良心の持ち主の批判や議論を受け入れるべきである。これは絶対に止めてはならないことだし、むしろ奨励されるべきことである。神によって与えられた権利、指令は絶えず回復される。特にキリストにおける自由を回復させることのために闘わなくてはならない。

25.概して、私達の宣教は人間中心、行動中心、使命中心、義務中心、律法中心である。行い中心の福音は全く福音ではない。絶えず、「やるべき、しなくてはならない、するべき、する必要がある」と攻め立てられることは、疲れるし、悪ければ恵みを殺してしまう。

フォーカスが、神が私達のために何をしてくださったのかではなく、私達が神のために何をすべきになると、未熟さと不安が広くはびこる。私達の欲しいものとはそれだろうか。私達は、あまりに多くの部位で疲れ、迷い、罪悪感に駆られた羊の群となっている。のびのびとした信仰から来る喜びと楽しみ、恵みと愛に対する内面の反応は取り去られた。福音の素晴らしい恵み、そのグッドニュースたる部分はすべてこの種の宣教と教えによりかき消された。これを認めようと努力しなくてもよい。証拠はどのミニストリーでも身の周りにあふれている。大きな部分で、結果を出すために、もっと大きいもっと良い数字のために、必死に努力してきたことの副産物である。しかし、栄養のある食物はどこにあるのか。秘儀はどこにあるのか。制度神学や御言葉の深い説明はどこにあるのか。心の清さと聖霊によって祈ることへの呼びかけはどこにあるのか。神の栄光と威厳に対する圧倒されるほどの感動はどこへ行ったのか。キリストの愛も、霊の交わりも、どこへ行ってしまったのだろうか。

最も重要な掟は「すべての民を私の弟子にしなさい」ではなく、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛しなさい」である。伝道は神の掟であり、人間のものではない。それは、キリストとその十字架を知っていること、また神への愛に由来した反応と服従の副産物でなくてはならない。しかし多くの場合、私達はこの大使命を私達個人の偉大さを追求するための計画に置き換え、最終的には多くの信仰を傷つけた。

以下に、最近辞任した伝道者が私達の説教や神学論の「実」である交わりに対して述べた彼の意見をいくつか引用する：

私達は自分について不健全な見方をする人々、神よりも人にどう見られるかに不健全に依存する人々の動き、救済のない非常に圧制的な制度の元にいる人々である。

私達の教会は、人々は信頼できないという大前提に支配されている。私達は人々を取り締まることに異常なエネルギーを投じ、あらゆる面から人々の生活を超聖書の権威と彼らの人格について早まった確信によって侵略している。

行いがすべてに増して尊敬されている。意見が重要視されている人々からすると、感じ、考え、検討し、討論し、奮闘すること、その他のいかなる知的プロセスよりも、行動することが大切である。

人々は現実にはあまりに選択肢が少ない。麻痺したり、苦々しくなったり、浅くなることがある。私達は麻痺を受け入れ、浅い従順をたたえ、原因を究明せずに苦々しさを罰する。

ミッションを成し遂げる方法についての人の解釈が結果的にミッションによって救おうとしている人々を傷つけているのに、それでもミッションが最上にある。

私達の諸教会の批評家はこう言い表した。「この動きで行われているとみえるのは、リードではなく圧迫である。彼らは羊を後ろから突き動かしている。神の目標であると思っていることを成し遂げるために、人間が地上の知恵を用いてこれを行っている。」

26. 何千人という男性は律法主義と権威主義のリーダーシップにより効果的にも去勢された。神にかたどって創造された男性の尊厳はつぶされた。彼らの夢や個人的な確信や「野性的な心」の火は消された。すべてのクリスチャンは兄弟を含め、当然従順を学ばなくてはならない。それが私達の栄光

である。しかし、個人的な夢、心にある気持ち、確信を押しつぶされて全般にわたって士気の喪失を招いた。数人以上の男性は勇らしさを失った。

27. なぜ長老は霊的さ、公正、経験から最も優れた資格者であるべきなのに、同じ規準や道徳的権威ではない人々に「監督」されなければならないのか。都合上のことだろうか。あるいは尊敬の欠如だろうか。いずれかである。

28. なぜ私達は大勢の善い忠実な男性を失ったのだろうか。最も大きな原因は、罪ではなく良心の呵責であった。このことは、結果を恐れて拒み続けてきた疑問を問い質さざるを得なくする。ある世界で愛され尊敬されているジオグラフィックセクターリーダーは、最近辞任した。辞任前に、自分の妻や子供のことについて個人的な日誌に以下のように記した。私はそれを引用させてほしいとお願いした。「私がどのような仕事をしているかでこれほど悩んでいて、家族のために、私のためにいいのだろうか。この動きの弱さも、また自分の首を守るために黙従する必要はないと悟るようになったら、私はどう感じるだろうか。私は心の奥底では彼らの霊的な人生のために何を求めているのだろうか。彼らに、私のようになってほしいだろうか。私のように生きてほしいだろうか。彼らは私がどれほど、こんな人物に自分が成り下がってしまったかと辟易しているかを既に知っているのだろうか。私は彼らの人生に文化的浅薄さを永続させようとはしないと得心させるには何をすべきだろうか。」

30. 学究的であるだけでなく、預言者的である教師が必要である。

31. 「公式なもの」はやめようではないか。どうして必要だろうか。私達の宗派という立場を強化するばかりである。あなたは私に代わって「公式に」語らないし、私もあなたに代わってそうしない。エルサレムはアンテオキアに代わって「公式に」語ったことはなかった。異邦人はユダヤ人に代わって「公式に」語ったことはなかった。私達が何においてでも公式にすることは信頼と信用をくじく。再び、御国においては、これは私達の自由の侵害である。現代都市では、誰も一誌しかない新聞の編集者を心から信頼はしない。私達には、色々な見方、議論、オープンさ、討論、対話が必要である。反対する自由とそれでも友達でいられることが必要である。

32. 私達は大量の刈り込みを辞めなくてはならない。当然、それは人の賞賛をもたらすだろうが（それがあなたの望んでいることなら）、神の怒りをも招く。神の神殿を滅ぼせば、神はあなたを滅ぼす。神の子らを滅ぼせば、神はあなたの子供を滅ぼす。考えてみなさい。この邪悪で歪んでいる、誤った人道主義の産物を悔い改めなければ、私達にも同じ結末が用意されるだろう。

90年代初期にロンドンではリバイバルと唱えられて、450人から500人がメンバーシップを剥奪された（刈り取られた）。このことは今日まで何百人というメンバーの間に深い傷と苦々しさを残している。この愚行によってどれほど多くの魂を破滅させたかを考えなかったとしてもである。故意ではなかったにせよ神の役を果たそうとして、族全体、親しい友人、相当数の“くすぶる灯心”が引き裂かれ、もみ消されてしまった。誰かこのことを指摘したのか。なぜこうしたことが起こったのか。なぜそれが続くのだろうか。神の慈悲が私達の上にあるように。

33. 私は悲しい心でこれを述べる。不幸にも、数人の御国の教師はある程度信用を失った。それは二つの単純の理由による。まず彼らは私達の権力の乱用や制度の害悪、神学論の問題について聖書的に語ってきたが受け入れられてこなかった。その場合、無法な人々が“私達の制度”を保護してきたとする私の議論はすべて肯定されたことになる。二つ目は、彼らは預言者的に異教、制度の害悪、リーダーシップの乱用への反論を選ばず、より緊急性の劣る事柄に携わることを選んだ。この場合、彼らは臆病だったことになる。

34. イエスは兄弟の間を隔てさせる役職名を持たないように命じた。すべての男性は平等である。しかし、私達の教会では事実、数人の男性は他の男性より上位にある。「御国ミッション伝道者」「御国の教師」「ワールドセクター・リーダー」「ワールドセクター長老」「ジオグラフィックセクター・リーダー」などの役職名を許し、それを楽しみもした。すべては「ラビ」よりもかなり重要なものだった。そしてもっと恥ずかしいものだった。

権力は確かに腐敗を生じさせる。高慢な霊は常につまずきに先立つ。高い門は絶えず破滅を呼ぶ。ベトロすら自分自身を「兄弟」、私達の「僕」、同僚なる長老と呼んでいる。彼の使徒業は奉仕の職務であり、役職名ではなかった。パウロは「私は取るに足りないもの」と言った。しかし、再度、これらのことすべては人間の傲慢と悪魔の虚偽によって腐敗した階層の当然の結果である。(テモテ3章)

35. 大勢のフルタイムの人々はあまりにもひどい損害を受け、情緒的に未熟で、罪悪感で満ち、自信がなく、言いなりになり、良心に焼き印を押されており、私は彼らが真に回復するには何年もかかるのではないかと恐れる。また何人かは、完全に去勢され、つぶされている。このことは仕えるリーダーシップではなく圧制的なリーダーシップに起因する蓄積された損害である。癒しは、彼らの「上」に立つ者が守勢に立ったり根に持たずに、威圧的なリーダーシップによって損害を受けたことについてオープンになることを勧め、批判を奨励することから始まる。「上」に立つ者は自分の犯した虐待や利己の野心について具体的に告白しなくてはならない。ロンドンでは、最も純粋で忠実なスタッフでさえ、裏切られた思い、利用された思い、良心に逆らうように強要された思いを訴え始めている。

36. 余りにも多くのスタッフ女性は悩みを抱えている。彼女たちは、彼女たちの肩に掛けられた罪悪感と圧力に情緒的に十分に整えられていない。神はこのような重荷や重圧を負うように彼女たちを創造されたのではない。不幸にも、私達の持つ「完全な女性」という西欧の女性像は世界中のほぼすべての国と文化におけるフルタイムの女性に強いられた。一方、新約聖書では一人として使徒や伝道者の妻の名前は登場しない。使徒の妻たちは彼らを経済的に支えるためだけに彼らに連れ立っていたようにさえ思える。「あるいは、私とバルナバだけは、生活の資を得るための仕事をしなくてもよいという権利がないのですか」(コリント9：6) 私は、こうあるべきだと言っているのではない。ただ、余りにも新約聖書の他のパラダイムが探られていないと感じるのである。私達は、福音における女性とのパートナーシップを多くの意味で共同伝道者に仕立て上げ、数人はこのモデルによってつぶされたのではないかと私は恐れる。

37. 数え切れないほどの多くの善い心を持つファミリーグループ・リーダーや聖書学び会リーダーがその役割を自ら辞めた。それは落胆と疲労からである。大部分においては、彼らに神における信仰、喜び、道徳的責任を教えず、リーダーズ・ミーティングはほとんどの場合、祈りや礼拝についてではなく、責任追及、目標達成、強いられるフォローアップについてである。その結果は何か。弱者や失われた者に対する誠実な愛ではなく、罪悪感と苛立ちと恥である。他の人はディサイプリング・グループが「大嫌い」なのである。世界中のさらに何千人の人が、主において彼らの「上」にいる者に見たり経験したりしてきたことで、フルタイムミニストリーを含むいかなる形のリーダーシップも欲していないのだろうか。余りに何度も引越して、さまざまなミニストリーを見てきたことの利点はより広い視野に立てることである。私達は確実に危機にある。

38. 地方教会の自治制と、新約聖書に登場する多くの形の地域教会組織に見られる優れた点は再度研究し、把握するべきである。地域教会の自治制は聖書的である。私達の世界各地における複数の教会の統制をゴールとした組織的階層度は、地域教会の自治原則をつぶして害する必要がある。たとえば「自治制という言葉は聖書になくとも」、それぞれの理由により、この点について私達は皆死んだ真似をしているかのようにになっている。

一方、偏見を持たずに新約聖書を読み調べれば私の言葉を確認できるだろう。協力は必要だが、統制は不要だ。一致は必要だが、体制への順応は不要だ。兄弟のつながりは必要であるが、いじめは不要である。与えることは必要、引き抜くことは不要。聖書的な自治制、または「自治政府」は異教の画一的な普及に対する防止策である。制度の害悪が広がるのを遅くするのである。私達の自由の侵害に対する第一の防衛線である。それぞれの教会が人間によって強要されるのではなく、真理に基づいて説得されるようになる。これによって、それぞれの教会が他の教会の説得にかかることもできる。御国には統治者はいない。他の教会に関する決定権を持つ柱となる教会はない。実際、自治制は私達の愛と兄弟としての一致を試す唯一の方法である。

39. 様々な教会はいつも様々な成熟への課程にあり、様々なニーズを持つだろう。聖書には複数のリーダーシップ構造と地域教会の指導のモデルが出ているようである。神はこれらについて絶対的な声明を出してはいないが、ただキリストが王であり、頭であり、私達は皆兄弟であることだけである。そこには事務所や監督がある。リーダーシップに権威があることは否定できない。しかし組織の構造やモデルはニーズや状況、成熟の段階などによって変容し、究極的には監督者が複数となることを目標としている。しかし、聖書のどこにも見出せない「一つの教会が他の教会の上に立つ」ことである。若い教会が自分の足で立ち、聖霊に満たされ、指導者を「推薦した」なら、解放し、自分の足で歩き、走り、倒れることすらも認めなくてはならない。(黙示録2、3章)パウロが「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。」と述べてその通りにした。彼は彼らをどこかの柱の教会にゆだねたのではなかった。

40. 中央集権の欠如は、明らかに聖書的で、一層人間ではなく神により多く信頼させる。聖霊のやり方は神秘的で人間の知恵の域を超えている。神の驚くべき性質(使徒9章のパウロ、使徒10章のCornelius)人間の計画していない動き、宦官の改宗と未知への送り出し、劇的な出来事の超自然的な発展の仕方、福音の広まりにつながった教会に対する攻撃はすべて人間の統制メカニズムではなく神から発生した。中央集権型の教会は物事の運びを遅延させ、究極的には聖霊の火を消す。

これからどうするのか

簡単な前進の方法はない。制度の害悪の除去に痛みと出血はまぬがれない。ヘブライ4:12のように運動全体に適用されなければならない。過去を無視して簡単に前へ進み始める誘惑を拒まなくてはならない。「汚れた洗濯物」を明るみに出し、病気を突き止め、それを取り除かない限り、私達の交わりに広まり続けることになる。これがかび(レビ記を参照)や壞疽(えそ)の性質である。過去を認めないで変わろうとすることは大きな間違いである。怖いことかもしれないが、歯神経を抜くように、完全に幅広く取り組まなくてはならない。その結果ある人にとってどのような意味を持つか、どれほどの痛みを生じさせるかが決断の根拠となってはならない。ひどく傷ついた信頼を、すべてを尽くして癒し、回復させ、再び燃え立たせなくてはならない。私達の優先すべきことは羊の群れを守ることであって、絶対に職位や組織を維持することであってはならない。私達は真実に直面して自分自身に対して、そして互いに真実を語り合わなくてはならない。そして、私達にはっきりと真実を語ってくれる人の言葉に耳を傾けなくてはならない。ペトロのパウロとの関係に勇気付けられよう、歯に絹を着せぬ真実が語られたが、ペトロはそれを根に持たなかった。以下、私達がロンドンで経験していることから私の提案や意見を述べる。

A. 器を清める

1. たくさんの祈りと断食をして事を進めなさい。
2. 自己防衛や根に持つことなく、オープンさと批判を求めなさい。どのようにしてこれに取り組

むかは多くの祈りと勇気を要することである。明らかに、悪魔はこの時間も使って私達を引き裂き分裂させようとするだろう。

- まずマタイ 18 章を適用し、より広い範囲の問題には公のフォーラム（討論の場）を持ちなさい。関係に深刻な損害を与える苦しい言葉について忠告しなさい。モデレーターには、メンバーに推薦され偏見がないと思われる霊的な人（フルタイムではない人）を選びなさい。
- 耳にすることや誰が発言者であるかについて驚いてはならない。フォーラムはオープンで誠実でなくてはならない。ある程度の感情を出すことも認めなさい。しかし、悪口を言ったり、コントロールを失ったりしてはいけない。コリントの「オープンな」礼拝が「良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いている」のなら、深い心の痛みや怒りから心を注ぎ出して語る公開討論はどれほどだろう。細心の注意を払いなさい。
- 教会の前で、長老と伝道者による心からの告白がなくてはならない。“ピンとくる”までこれをやるうとしてはいけない。そうでないと、クリスチャンは一層怒り、落胆し、皮肉な態度にさなりかねない。
- リーダーがまず責任を果たしているか確認され、それから群である。私達はこれを逆にしている。聖書に出てくるほとんどの鍛錬と裁きの例について考えよ。礼拝所から始め「それらすべてを殺せ」教師がほかの人たちより厳しい裁きを受けることになる。」リーダーはみな、律法主義者、ユダヤ人至上主義者、偽善者、人の顔を平手打ちするような者であった。多くがゆだねられた者には多くが期待される。
- 一部のリーダーは脳に退き、また真にたたえられるためにメンバーの信頼をもう一度勝ち取るという純真さを持たなくてはならない。私達は自分の存在が不可欠のものと考えてはならない。イスラエルのトップリーダー250人は一撃で打ち倒された。（民数記 16：35）
- マタイ 5 章を実践し、供え物を祭壇の前に置き、あなたが傷つけた人々を探し出しなさい。誰かが先に「訴え出なくてはならない」のを待ってはならない。完全に謙虚で柔和でありなさい。
- 個人的にも、公にも、必要なだけ、具体的に謝りなさい。
- 動機づけする方法としての毎月の統計を取るのを廃止しなさい。神がすべての人の心に深く働いて清め、和解をもたらすまで、しばらく「ゆっくりと」しなさい。失われた者に対する「愛」を人ではなく神の御前で道徳的義務であることを教えなさい。あなたはリーダーとしていつ最後に失われた者のために涙を流し、自分の救いの代わりに救いを求めて神に願っただろうか。この種の愛は、統計を取って目標を決めることに固執することでは育まれない。むしろ、祈りと聖霊によって育まれるのである。（ローマ 8、9 章）
- 威圧的な DP 関係を取り除かなくてはならない。これらすべての「小さなリーダーたち」は悪い神学論に対し免疫があったわけではない。もっと祈りと愛と神の御心を求めることこそ必要である。すべてのクリスチャンは、アドバイスを求め、聖書を読むように励ますべきだが、自分の良心に従って行動を起こしたり、適用したりする自由が与えられるべきである。
- 神の恵みという福音の性質を深く学び直さなくてはならない。（ガラテヤ書を始めとして？）
- もし誰かがオープンになり、傷ついた思いや怒りを表現したことで不当な影響を後々まで受けるのなら、神に圧制的な指導者を載いてもらいなさい。

B. 器を満たす

一度、家が悪霊を追い出して掃除をして整えられ器の内側が清められたところで、すばやく愛と恵みと自由と神への畏れで満たそう。祝福と義務を伴うが十字架を動機に行こう。

- キリストは私達の説教、教え、カウンセリングの圧倒的中心になくてはならない。このことの重要性は明らかであるようでいて、その実ほとんど実践されていない。これに留まっていれば、元々多くの問題の発生を防いだことだろう。（この点について理解できるよう コリント 1 章を熟考しなさい。）

2. 私達の礼拝が第一に、何よりも、礼拝することに集中したものにしなさい。
3. 愛、恵み、謙虚さをもってリードしなくてはならない。そうすれば、私達は罪や正しさ、到来する裁きについても大胆に説教できるだろう。
4. 再び規則、律法主義、人間の伝統が忍び込まないよう、警戒しなくてはならない。
5. 私達の説教で、クリスチャンたちの飢えに応え、自分達の優先事項ではなく彼らのニーズを満たす内容にしなさい。
6. 教会に自治権を回復させなさい。それと共に、真の一致を回復させ、リーダーたちに地域のクリスチャンたちのニーズを満たし、すべての信者が「王の系統を引く祭司」としてあらゆる才能や賜物を発揮できるようにしなさい。
7. 教会の推薦により、教会に給与を受けないスタッフを歓迎し、積極的に教会生活全般に及び決断課程に参加させよう。聖霊と信仰に満ちた男性たち。(使徒6章)
8. 私達は子供たちを自立して判断できる者へと、必要であれば、「独立した(気ままな)」精神を持つ者へと訓練しなくてはならない。パウロは「あなたがたの間で、だれが適格者がはっきりするためには、仲間争いも避けられないかもしれませんが」と述べた。個人的に私自身は自分の子供には教えられたことすべてに疑問を持ち、もちろん人を尊敬しつつ、しかし何より神を畏れ従ってほしい。
9. 今必要なことは、力強い勇敢なリーダーシップであるが、さらに重要なことは、正しい謙虚なリーダーシップである。独裁者や君主ではなく、神の御前に砕かれた人々、あらゆる意味で真の「僕のリーダー」が必要である。
10. 集団で神の御前にへりくだり、神が天の窓を開き祝福を限りなく注ぐかどうか試してみようではないか.....。

自由の栄光と代価

自由の栄光

ゆだねることや従順は強制されない
 神に対する真の愛が探求され、知られるようになる
 ミッションの広がりをもっと瞬発的で迅速になる
 私達の愛の誠実さが試される
 真理を愛する者となることに励まされる
 献身は心からものとなる
 弱い者を受け入れることを学ぶ
 純粋な動機の喜び
 体制への順応ではなく真の一致
 強制された異教に対する防御
 与えるのは愛と信仰から
 与えることはいやいやではなく、強制されてでもない
 真に成熟する唯一の道
 私達の(意見の)違いは驚くべき素晴らしいものである
 激しい論争は認められる
 誰が真に神に属するのかが示される
 真の霊的成熟へと養われる
 神ご自身の意思がより効果的に成し遂げられる
 教師は職務遂行について確認される
 真理を得るための闘いが私達を一層強める

愛と憐れみによって弱い者をフォローアップする
失われた者に対する真の情熱
何者の奴隷にもならない
すべての者の奴隷となる
外面ではなく、心を動機をディサイブルする。

自由の代価

悪い決断が下される
教会単位で人々は去る
異教が起こる
反キリストが立ち上がる
教義の悪魔がはびこる
 麦と一緒に毒麦が育つ
一家全体が減びる
私達の交わりの中にコリントの教会のような教会が存在するようになる

しかし最終的には、神が現れる最後の時に自由意志、率先した従順、愛のみが、何のものがめもなく、恥もなく立つことができるだろう。

最後に元超保守的メインラインキリストの教会牧師である セシル・フック氏からの意見

自由に流れる川

川が中間の流れを作り出すのに、岸から岸へと押し上げられることがある。常に汚染物を受け入れるが、流れている川は自らを清める傾向がある。流れを止めれば、淀み、あらゆる浮きカスやヘドロを生み出す。自由に流れる川は、厳密な意味では決して完全に清い状態になることはなくても、絶えず浄化作用の課程にある。

教会についても同じことが言える。自由で自立した弟子は地上の統治者に制限されることなく行かしてあげなくてはならない。教会によって、また世代によっても自由な人々の解釈や考え方が異なるかもしれない。教会は正しい方向性を求めて一方の極端からもう一方の極端へと変わっていくかもしれない。教会は常に浄化の状態にあると同時に、常に汚染の危険にさらされるだろう。しかし、その構成員が過ちを犯す人間であるため、完全に過ちのない状態になることもない。次世代が忠実であるよう次世代にまでコンセプトを持ち越させるために、一世代である制度を永久化し信条化することはできない。次世代を統制しようとする努力は、体制への順応をもって一致を得ようとするものである。川の流れが止められると、淀み、知的な同系交配に依存するようになり、教義の怪物を生むのである。

マリリンからの個人的な手紙：

皆さんの多くは、私はどう感じているのかと思っていらっしゃるのではないのでしょうか。私はヘンリーが書いた文書に全面的に賛成です。私自身、最初の頃の手紙を推敲しました。これらの問題は私達の間でもう何年も話し合ってきたものです。私の性格と恐らく私の女性としての視点から、私の態度は意見を主張していくというよりも、むしろ、「時が来れば神様が事を運んでくださる」ことを信

頼するというものでした。私はいつも、私達は神の民であり、神様はその私達を完全に脱線してしまうまで放っておかないと信じてきました。また、私はいつも私達の間には、義のために闘い神様が罪をあらわにされるたびに悔い改める善い心を持った人々がいると信じてきました。

私はショックを受け悲しくなるようなことを見たり聞いたりしてきましたが、言葉を発することをしませんでした。私は自分の御国の域内で正しく生きてリードしようと頑張って、他の人もそうしてきていることを願うまででした。しかし今やロンドンであらわにされ、表現されている心痛、傷、怒りを見て、私はダチョウのように走ることをやめ、声高に主張する時が来たかと確信します。私はこのことがどのようなリスクを要するかを心得ていますが、語らないことは劣悪な罪だと思うのです。私は神様がヘンリーの心にこれらの問題について重責の念を与えたのだと信じ、ヘンリーがこの文書を書き上げるために霊的な努力とエネルギーを尽くしたことを誇りに思います。私は間近で彼が悩み嘆きつつ聖書を広げ、深く愛する自分の教会との、そしてその中に持つ関係について闘う姿を見ました。これらのことは公に語られる必要があることで、多くの人が耳を傾け、また大変革に必須である自分自身の声をディスカッションで聞かせてくれることを切に願います。MK

http://cit.ucd.net/GV/Pacrim/JP/tokyo/chinese/HenryKriete/HK_J.doc

<http://pacrim.ucd.net/GV/Pacrim/JP/tokyo/Announcements/Articles/Foreign/HenryKrieteLetterPv3H.htm>

http://pacrim.ucd.net/GV/Pacrim/JP/tokyo/Announcements/Articles/Foreign/LA_apology_letter.htm